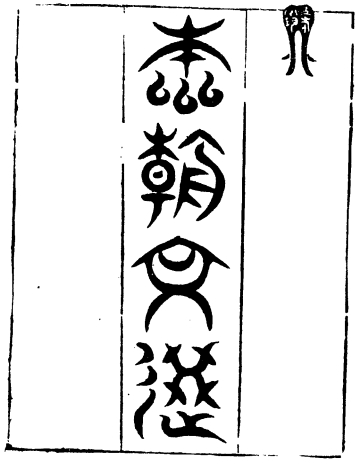
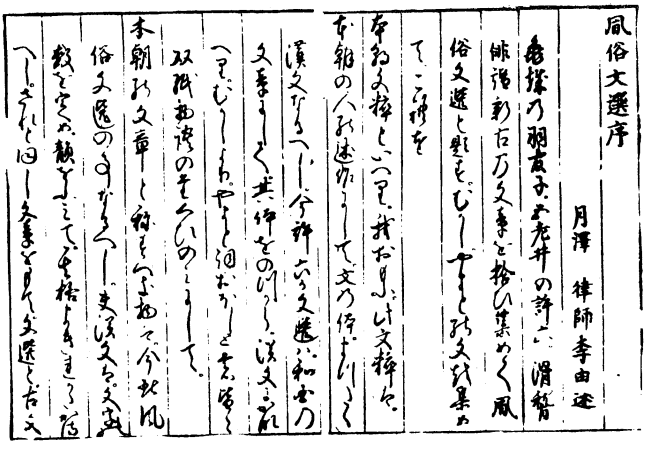
咸谷文集



五老井 許六遷

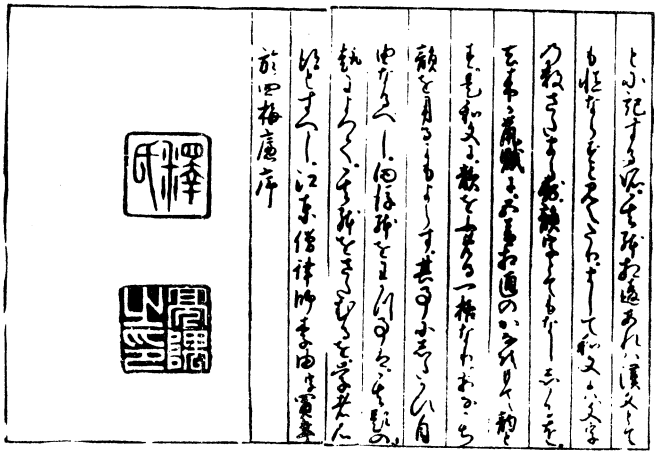

風俗文選序

月澤　律師李由述

風俗文選序

月澤　律師李由述

龜城の羽官子。五老井の許六。滑稽俳諧新古の文を拾ひ集めて風俗文選と題す。むかしやまとの文を集めて。これを本朝文粹といへり。我おもふ。此文粹は。本朝の人の述作にして。文の体。まつたく漢文なるべし。今許六が文選は。和國の文章にして。其体をのづから。漢文にかなへり。むかしより。やまと詞おほしとも。皆〻双紙物語のたぐひのみにして。本朝の文章と稱すべき物は。今此風俗文選の事なるべし。夫漢文は。文字の數を定め。韻をふみて。其格まぎれがたか



るべし。されど同じ文章をもて。文選と。古文とに記する所。其躰相違あれば。漢文とても慥ならずと見えたり。ましてて和文には。文字の數さだまらず。韻字とてもなし。しかるを。去來が鼠賦に。五音相通のかなをもて韻とす。是和文に。韻をふめる一格なり。あながち韻を用るにもよらず。其事にしたがひ自由なるべし。向後躰をわかつ事は。其題の趣によつて。其躰をさだむるを。學者心得とすべし。江東僧律師李由字買年於四梅盧序

風俗文選序

落柿舍　去來

世に俳諧の文あつて。其集といふものいまだ聞ず。先師一たび思ひ立給ふ事侍れど。心にかなふ物希なれば。むなしくやみぬるも十とせ余。五とせなるらん。今や門葉のたれかれ。風雅に腹ふくるゝまゝに。管城に槊を横へ。文場に臂をふるふものすくなからず。今此文集に斧を入て。始に柴門辭あり。終に頌讃の風流を盡す。或は書あり。或は論ありて。說賦のまとを述。文謀の哀を殘す。自堪能の才ありて。許多の躰をもらされず。これを千歲の後に施して。はいかい文章の手本とせば。彼童子の師の。句讀を敎ふる類ならんや。此文をしれる者は。此道をしる者なり。作者みづから五老先生と稱するものは。湖東森氏六子にして。虛實にあそべる人といふべし。しからば今の名望を感じて。此文選を戀ざらめかも。寶永元秋日序。

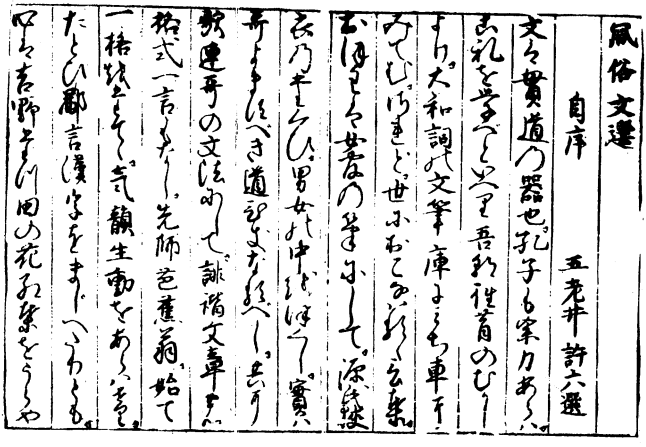
風俗文選序

東華坊　支考

もろこしに文選ある時は。吾朝に文選なからんやと。ことしえらびてあそぶものは。湖東の武子。許羽官なり。凡文章は。周孔の心を傳へ。莊孟の筆に鼓舞せられて。和漢に心をつたふれども。姿を傳ふるものは又まれ也。人は其すがたはつたふべく。その心はつたへがたしとぞおぼえぬる。文章に何の心かあらん。心は天地の心なり。すがたは世〻に變化して。其變化をしれる人をこそ。姿をしれる人とはいふなれ。昔の人の下恵をまなべるも。道につたふべき心なければ。すがたの變化をまなべる人とはいふべし。されば源氏物語は。はじめ終ありてたやすからず。人の見てあそぶ處も。卷〻にまち〻なるべし。狹衣は。歌にあそべりとぞ。うつぼ。竹とり。おちくぼの草子など。清少納言が枕双紙は。見る事にあそび。聽事にあそびて。はじめ終あらせむとせば。いかでかは。榮花物がたりとかいへるものを。我いまだ見ねばよくもしらず。伊勢物語の。こと葉はぶきたるをさへ。土佐日記はまたさらなり。日記は。おのれがおぼえ書なれば。人の見て。えしらぬ事をも。我は見てあそぶ覽かし。記と紀とは。おなじ心ながら。旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて。ひとへにものゝふの草紙にはあらせじとて。祇園精舍の鐘の聲に。無爲のあそびを書添たるなり。平家物語とつけたる名も。物に對したる名なるべし。鴨の何がしは。方丈の記にあそべる人也。發心集といふ物は。さるものともおぼえぬにや。

四季物語といふものありて。其人の作にはあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし。歌の心のきすくなるは。まして。撰者の法師のあそび處なるべし。兼好法しのつれ〴〵草は。それにはおとりても侍らんか。硯にむかひて。物をさだめねば。世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉ノ記も。あるひは長嘯の擧白集も。おのれ〳〵が心にあそびて。むかしのすがたをつたへずといふ事なし。天はこれをもて月にあそび。地はこれをもて花にあそぶ。龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば竹すゝし。梅に鶯。紅葉に鹿。いづれかかたちを傳へずしてあそばむ。先師。つねにいへりけり。漢には之乎者也の四字をもて。貴賤尊卑の詞をわかち。和には手爾遠波の四字をもて。暑し涼しの時宜をとゝのふ。文章はまして。手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらず。二句の句讀をしらざれば。よむ者息のつぎはをわすれて。海雲海鼠腸と。すゝりつゞけたらんは。はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび。又そしられてもあそぶ中に。我は此文選の時をほめて。あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日



風俗文選

自序　五老井許六選

文は貫道の器也。孔子も余力あらば。これを學べといへり。吾朝往昔のむかしより。大和詞の文筆。庫にみち車にみてむ。されど。世におこなはるゝ言葉。おほくは女官の筆にして。源氏狹衣のたぐひ。男女の中をつくし。實は歌よますべき道びきなるべし。共に歌連歌の文法にして。誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁。始て一格をたてゝ。氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言漢字をまじへたりとも。心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ。和歌の浦に志をよせて。難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縱

横自在を盡したりとも。ひとつの趣意をたつる所なくては。童蒙の丸い物つくしに落て。果は松坂を仕舞となせる。甚無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章。躰は二十。文は一百十有余篇。皆〳〵俳諧文章なり。これをよみ。これを學て。此門に入べしとて弟子五老井許子六。撰み集て。寶永二乙酉歳。自序して風俗文選とは云爾。

印　印

風俗文選目錄

五老井　許六選

○卷之一

辭類

柴門ノ辭　芭蕉翁
示ニ秋ノ之坊ニ辭　支考
送ニ新道ノ心ニ辭　丈艸
鉢扣ノ辭　去來
瓢ノ辭　許六
示ニ古鏡ニ辭　李由
燒ル蚊ノ辭　嵐蘭
四季ノ辭　許六

○卷之二

賦類

南都ノ賦　汝村
吉野ノ賦　丈艸
冨士ノ賦　嵐蘭
前鷹山ノ賦　支考
鎌倉ノ賦　許六
松嶋ノ賦　芭蕉
湖水ノ賦　李由
後鷹山ノ賦　去來

○卷之三

賦類　附譜

鼠ノ賦　去來
旅ノ賦　許六
揚揮豆ノ賦　毛紈
閑居ノ賦　汝村
四粿廬ノ賦　李由
招魂ノ賦　支考

譜類

百鳥ノ譜　支考
山水ノ譜　許六
百花譜　許六

○卷之四

說類

簑虫ノ說　素堂
閉關ノ說　芭蕉
名ニ阿段ニ說　許六
雜說　不知作者
艸字藤說　程巳
山ノ芋說　香仲
柴實ノ說　凡兆
師ノ說　許六
出女ノ說　木導
愛粿說　万子
草刈ノ說　露川
嘲ニ書惑ニ說　毛紈

解類

獲麟ノ解　許六
藪醫ノ者ノ解　汝村
長雪隱ノ解　許六

○卷之五

記類

落柿舍ノ記　去來
幻住庵ノ記　芭蕉
十一八樓ノ記　芭蕉
五老井ノ記　許六
九華亭ノ記　汶村
琵琶亭ノ記　許六
風水二臺ノ記　許六

紀行類

鹿島ノ紀行　芭蕉
南行ノ紀　李由　許六

序類

曠野ノ序　芭蕉
猿簑ノ序　其角
宴ニ柳ノ後園ニ序　支考
要文集ノ序　許六
近江八景ノ序　千那
畫樓繪合ノ序　許六
四絶文章ノ序　李由
麻生ノ後序　許六
銀河ノ序　芭蕉
番椒ノ序　野坡

○卷之六

箴類

飲食色欲ノ箴　許六
聽ノ箴　許六

銘類

机ノ銘　芭蕉
東ノ銘　支考
西ノ銘　許六
茶碗ノ銘　嵐雪
雲華園銘　汶村
飯鮒ノ銘　吾仲
左右ノ銘　芭蕉
是非齋ノ銘　許六

誄類

嵐蘭ガ誄　芭蕉
丈艸ガ誄　去來
去來ガ誄　許六

○卷之七

歌類

挽歌　支考
鄙歌五首

文類

俳諧發願ノ文　涙化
聖靈祭ノ文　李由
剃髮ノ文　支考
祭レ猫ノ文　支考
弔ニ古戰場ノ文　芭蕉
返店ノ文　路通
斷絃ノ文　許六

○卷之八

傳類

公平ガ傳　汝村
牧童ガ傳　支考
蠶虫ノ傳　去來
直指ノ傳　許六
東順ガ傳　芭蕉
五郎四郎ガ傳　支考
疝氣ノ傳　李由

碑類

壺碑ノイシブミ　芭蕉
笠塚ノ碑　李由

○卷之九

辯類

詩歌俳諧ノ辯　丈艸
豆腐ノ辯　許六
手足ノ辯　汝村
射御ノ辯　許六
定ニ先後ヲ辯　支考
天狗ノ辯　木導
人參ノ辯　許六

表類

雨乞ノ表　許六
嘲ル佛骨ヲ表　其角
讀ム佛骨ノ表ヲ　厚爲
陳情ノ表　支考

○卷之十

論類

旅ノ論　許六
蕎麥ノ論　許六
仁不仁ノ論　北枝

頌類

俳諧ノ頌　李由
酒德ノ頌　朱廸
蕎麥切ノ頌　雲鈴
石臼ノ頌　芭蕉

讃賛類

西行上人ノ像ニ讃　芭蕉
美少年ノ畫讃　許六
入學ノ賛　許六
神農ノ讃　涼蒐
團扇ノ賛　荊口
紫芝ノ岡ノ賛　許六

書類

院ノ艶書
日蓮上人ノ報書

本朝文選

○作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也。武名松尾芭七郎。奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戸。風雅爲業。號桃青。乃誹諧正風躰中興開祖也。嘗世爲遺功。修武小石川之水道四年成。速捨功而入深川芭蕉菴出家。年三十七。天下稱芭蕉翁。遊東西南北。說風雅助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一遇(寓)難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也。號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁效風雅。後著有礒海前後集。病薨。年三十一。

僧丈艸者。尾州犬山產也。壯年辭武出家。隱松本山上。蕉門之騷客也。能詩。後三年閉關而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田產也。居于本福寺釋名妙式上人。嘗任律師。號蒲萄

坊。中華蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之產也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。嘗任律師入蕉門而學風雅一年久。故著韻塞篇突。宇陀法師書。病死。年四十五。

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之產也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師滅後遊東西南北。說風雅而助諸生。故往往慕支考風者多矣。中遇(寓)居于勢州山田。後歸故國作誹書數篇。辨俳諧之論。

晉其角者。武州江戶產也。生醫家不學醫術。終業俳諧。寶井氏。號狂而堂。蕉門之一人而後起己一風。著誹書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。業風雅。遊武江戶。蕉門之高弟也。後別妻出家。

野坡者。越之前州人。生商家居于武江戶。蕉門之學者也。一遊西海不定其所居。隨師得炭俵之撰號。

北枝者加州金澤之人也。業磨工。見蕉翁好風雅。北方之逸士也。

涼菟者勢州山田神職之人也。業風雅。初號團友。

露川者伊賀之人也。生商家居于尾名護屋也。好蕉門之風雅。

雲鈴者奥州南部之人。產武。壯年入道自號摩詰菴婆且人。風雅師東花坊。一渡佐渡島著入日記。

吾仲者洛陽人也。居于六條。業佛畫。好風雅。師李由。自號柳後園。著柿表紙三卷。

路通者不知何許者。不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命。飄泊之中著俳諧之書。

凡兆者加州之產也。業醫居于洛。學蕉門之風雅。一罪事不知其終處。

素堂者山口氏也。居于武陽。避世務隱于深川。友芭蕉翁善。

嵐蘭者不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉家。而奉諫速辭官。携母隱于武淺艸。蕉門之老弟也。爲月遊于鎌倉病死。

荆口者濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故老之士也。此筋。千川。文鳥。三士之父也。後致仕改名東宇。

去來者肥前之產也。後隨兄居于洛陽。向井氏也。中華蕉門之高弟也。號落柿

舍。隨レ師選二猿籠一。後病死年五十三。

万子者加州金澤之武士也。生駒氏。號二此君菴一。蕉門之英士也。

厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門之英士也。病死。

木導者。江州龜城之武士也。直江氏。自號二阿山人一。蕉門之英才也。師翁稱二奇異逸物一。

汶村者。江州龜城之武士也。松井氏。字師蓍。號二九華亭一。蕉門之達士也。

嘗能二書畫一。繪師二五老井一。

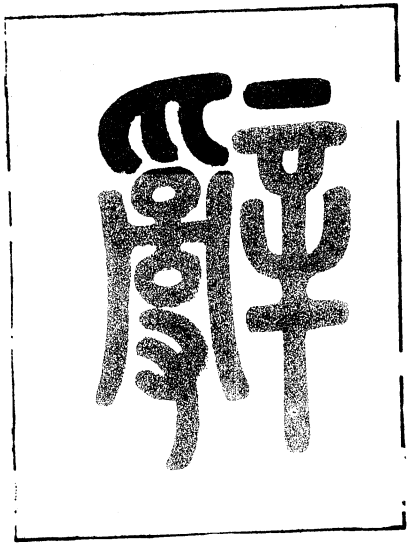
毛紈者。江陽彦城之武士也。北山氏。號二大雅堂一。好二風雅一。愛二畫圖一。師二五老井一。

程巳者。近州龜城之武士也。朝倉氏。號二白日堂一。愛二蕉門之風雅一。

朱廸者。江陽彦城之武士也。寺島氏。號二青露臺一。年久好二風雅一而入二蕉門一。病死年四十三。

撰者許六者。江州龜城之武士也。名百仲。字羽官。森川氏。號二五老井一。別號二菊阿佛一。一見二蕉翁一。得二正風躰實一。血脈道統之門人也。常友二李由一撰二俳書數篇一。

以上二十八人



柴門辭　芭蕉

示秋之坊辭　支考

送新道心辭　文州

鉢扣辭　玉來

瓢辭　許六

示古鏡辭　李由

燒蚊辭　嵐菊

四季辭　軒大

○辭類

柴門ノ辭

芭蕉翁

送レ歸ニ許一六之故郷一餞一別之一文也

○去年の秋。かり初に面をあはせ。ことし五月のはじめ。深一切に別をおしむ。其わかれにのぞみて。ひとひ草扉をたゝいて。終一日閑一談をなす。其器。繪を好み。風一雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲好むや。風一雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其まなぶ事二にして。用一をなす事一なり。まとや。君子は多一能を耻といへれば。品二にして。用一なる事。感ずべきにや。畫はとつて予が師とし。風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精一神徹に入り。筆端妙一をふるふ。其幽一遠なる處。予が見る所にあらず。予が風雅は。夏爐冬扇のごとし。衆一にさかひて用る所なし。たゞ釋阿。西行のとばのみ。かり初にいひちらされし。あだなるたはぶれども。あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも。これらは歌に實ありて。しかもかなしびをそふると。の給ひ侍りしとかや。されば此御一工葉を力とし。其ほそき一すじをたどりうしなふ事なかれ。猶古一人の跡をもとめず。古一人のもとめたる所をもとめよと。南一山大一師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて。灯をかゝけて。柴一門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢ノ辭

許六

○男鹿なく。此山里と詠じける。嵯峨野野方に隱れたる人あり。まだつり兀の跡もきえかね。わり麥の系圖咄に。甲州の劔も。今は菜一刀一丁の身一帶にて。あまりさびしさに。垣に瓢一簞を植て。折ふしの筆次手にや。中にもしたゝか物に書付侍る。

〽甲にもならで果たるふくべ哉。無一名子とは見え侍れど。身は雲一水の便りなき。浪一人ひがみとぞおぼえける。かの岡に草刈おのこあつまり。此甲のにくさに。ざと返しとはなくて。

〽かまきりに降一參したるふくべ哉とぞ笑ひける。あるじきゝつけて。陋巷にあつて一瓢のたのしびは。賢人の上。里の子はしるまじ。草刈の中より。其賢人くらべならば。許由はかしがましとて

捨たりとの〻しる。あるじいよ〳〵勝に乗て。か〻る名物もしらず。汝等は田植の煎茶を入れ。たね物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむづかしき色もなくて。楊墨がこ〻ろざしに叶ひ。源氏の巻の名となり。歌人の腸にまとひたる夕顔ぞかし。抑夕がほの。玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず。たゞ喰物とほしき。五條あたりに徘徊して。貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く。汝宇治の物語をしらずや。答て曰く。其拾遺の瓢も。咎なき隣人が一命をたてり。これ全く瓢の罪といはむ。か〻る目出度ひさごに。何の罪かあらん。かれ佛縁深きゆへ。空也上人には携へられ。鉢たゝきの祖師とはなりける。かのさゞ波や。かたゝの海士が海老すくひも。佛縁の内かとぞいひける。隱士大きに打腹立て。汝がいひ分。皆〳〵理屈の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の樂は。身の後の金よりは勝たりといへり。草刈が云く。其樂といつば。上戸の情也。瓢のかたちをいはむ。腹便〻と肥ふとりて。口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは。下戸のなげきなりと大笑して。歌て云く。滄浪の水。すめらはつけて泳ぐべし。濁らば瞼を押ゆべしといひて。去て共に物いはず。

示秋の之坊辭

支考

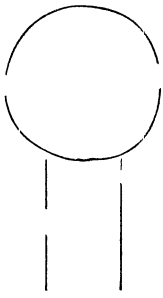
○あら秋の坊や。紅葉の秋か。世の秋か。又たゞ秋の坊なるか。見ればいとにくさゆに。見ねば又なつかし。好惡は人の心にありて。彼は一物もなきもの也。むかし溯南の幻住庵に。一夜の夢をむすびしが。其夜もしらず。よみしやすらん。にくみしやすらん。無常迅速の一句をあたへて。先師も麓までおくりは申されしか。今此草庵に。同じ心にすね合たる法師の。相住て侍るが。物いはぬ日の終日も侍りて。かく住けるこそあやしくたふとけれ。我又こゝに來りてあそばゞ。何某が三十年といふ。歌よみにやあらんと。そこの人〳〵もわらひけるなり。秋の坊が云く。はいかいはさる事ならんか。曰く。さだむべからず。俳諧にくはしからんとせば。世情におちて。心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞするすみならんこそ。法師達におきてはさる事なれ。たゞはいかいにはあそぶべし。俳諧にまどふべからず。しるてくはしからんとせば。東花坊がごき。世情のうき名とりてむ。はいかいのくるしさ。誠にしかのみならんや。

〈瓜ふたつ三ッにわる手や塵劫記

示僧の古鏡辭

李由

○こゝに僧あり。古鏡といふ。學業にわしりて。東湖の濱にあそぶ。產は濃州關ならば。など志津。孫六が鍛を得て。紫電臼虹赫〻とし。三尺のひかりを振はざるや。天下誰とあつてか。敵するものあらん。さるはむかしの釵。今の茱刀とおほえ。俊成卿の花の鏡もうち疊り。今は閑村の葬にうづもれ。祭のはやしにもたゝかれず。終に鎭鑄の奉加道具にきはまり。きのふもまるく。けふも又丸し。



此人かつて詩をよくす。多情有聲の畵を彩り。美言無糸の弄をあやつるといへども。猶風雅に足をそばだて。敝嶋の道をさぐり。一とせ先師。關の旅寢の頃ま見えて。一棒をうけたりといへども。いまだ澁皮もむけず。今幸に予に參じて。又鏡を磨がむとす。風雅はもと明なる物なり。鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨とをしらず。速に去つて。水銀を求め來れ。

〻分別に花のかゞみも疊りけり

贈新道心辭

丈　艸

○世をのがれて道を求るほどの人は。皆一かどの志を發して。まとしきつとめともしあへれど。年を重ねぬれば。又かれこれにひかるゝ緣おほく。事繁くなりて。更にはじめの人ともおもほえぬ。ふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて。出家は出家以後の。出家を遂べきよし。勸めはげましぬ。魯九子は。みのゝ國蜂屋の山里にあそびて。いまださかむなる齡の。いかなる緣にや。俄に墨の袂に染かへて。ちりのすみかをかけ出。山寺にかきこもれるよし。傳聞侍りて。今のこゝろざしの正しきに。猶後の出家をおこたらぬ。みさほのほどをねがひて。拙き辭を申おくりぬ。

〻蚊屋を出て又障子あり夏の月

燒蚊辭

嵐蘭

○蚊。蚊帳中の蚊。汝を燒に辭をもてす。汝此辭を聞時は。わが手に死すともみづからたれりとせよ。夫澤雉は。樊中にやしなはれ(れむ)ことをねがはずと。彼は心をとる。これは食をもとめて。人の肌にせまる。かれを愛せむや。これをにくまむや。

「きゞすは草にかくれて。草の爲にやかる。汝は帳に入ッて。帳の爲にやかる。

あはれなるかた。いづれとかせんや。

「蟀促織の火に入るは。戀ゆへときけばわりなしや。雨に濡露にそぼちて。さそはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶なむ事もしらず。いく偽の夜や頼み來し。汝がやかるゝ事。何を情とせむ。義經の逆落は。暫時さしをく。須山小宮山が夜討は。かくれて謀をなすといへども。天下の爲にして。名をのづからしたがふ。又汝といはむや。

「虞舜は頑父をさけ。日本武尊は。夷賊をのがれ給ふ。共に天にして。汝といふべきにあらず。大盜あに樞戸を穿むや。汝がふるまふを見るに。帳をたるゝ時は。其鼎〳〵の間をうかゞひ。垂おはつて。縱横の透間をたづね。すべて小破の所をもとめ。人のしりへにつきて。入らむとはかる。嗚呼、跖蹻が徒にはあらじ。

「すべて汝がおこなふ處。猛き事もなく。たのしむ事もなし。あはれなるかたにも。やさしきかたにもあらず。たゞにくむべきものゝ甚しき也。

「蚊。蚊。帳中の蚊。汝をやくに辭をもてす。汝此とばをきく時は。我手に死すとも。みづからたれりとせよ。

〽子や啼む其子の母も蚊の喰む　去來

鉢扣ノ辭

○師走も二十四日。冬もかぎりなれば。鉢たゝき聞むと。例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく。雨そぼふりて。とみにも來らねば。いかに待侘び給ひなむといぶかりおもひて。

〽籠こせ眞似ても見せむ鉢扣と。灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど。猶あはれなるふし〳〵の。似るべくもあらず。かれが修行は。瓢簞をならし。鉦打たゝき。二人三人つれてもうたひ。かけ合ても諷ふ。其唱歌は。空也の作也。かくて寒の中と。春秋の彼岸は。晝夜をわかず。都の外。七所の三昧をめぐりぬ。無緣の手向のたふとければ。かの淵春も。わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶釜をさし。大路小路に出て。商ふ業かはりぬれど。さま同じければ。たゝかぬ時も鉢扣とぞ。曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり。或は四方にからげ。法師ならぬすがたの衣引かけたれど。それも墨染にはあらず。おほくは萠黄に鷹の羽。打ちがへたる紋をつけて着たれば。月雪に名は甚之亟と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬。ことどくね覺はやらじと吟じけるも。ひとり聞にやたへざりけむ。打とけて寢たらむは。かへり聞むも口おしかるべし。明して社との給ひける。横雲の影より。からび

たる聲して出來れり。けに老ほれ足よはきものは。友どちにもあゆみおくれて。ひとり今にやなりぬらんと。翁の。

「長嘯の墓もめぐるか鉢たゝきと。聞え給ひけるは。此あかつきの事にてぞ侍りける。

四季ノ辭

許六

古ノ和歌文章ニ謂ヒ四季ノ者ノ多矣假令姿用ニ俳諧調ニ爲レ之其情和歌文章不レ可レ更今此辭全篇以ニ財寶之上ニ靈ニ四時情是ニ誹諧也

○行ノ年の晝ノ夜はたへずして。しかももとの晝ノ夜にはあらず。子ノ取婆々の足手を返し。隱坊の鋤鍬休する時なし。人若かりし時の月日は。行ノ道ゆるやかに廻り。老ての後の光ノ陰は。慥に徑ノ路を行にきはまれり。五ノ十年來のすぐるは。一ノ杯の蕎麥切よりも早く。今又五ノ十ノ年生む事は。田ノ樂を翻すよりもやすし。つら〳〵一とせの變ノ相を見るに。いづれかあはれならざるはなし。むかし紫ノ氏清ノ氏の物語にも。華ちり時鳥とかはるあはれをのべて。錢ノ金のあはれをいはず。世わたるわざのはたらきは。たゞ此ものゝ手柄にして。神ノ佛とても及びがたし。まづ春の御ン賀の引出物より。八ノ朔歳ノ暮のたてまつり物。皆金ノ銀の手柄にて。下万ノ民の末〳〵まで。千代よろづ代を十かへりと。あふぎ奉るもとはり也。金ノ子の威ノ德とて。大判は裸で出仕し。白ノ銀は付ノ臺とて畢ノ下したるこそ哀なれ。錢は凡夫の手に落て。靑ざし一貫文を頭とし。こき箸。蠟燭一ノ挺ぎり。廿五十の年玉まで。皆相ノ應にこそめでたけれ。春實引をせぬ人は。六月の蚊にくはるゝとて。しはき親仁もゆるされて。錢つかはすもとはり也。え方參の十二燈より。よろづの神〳〵はとりそめられて。細き穴から世の中を。廣くめぐみをたれ給ふ。梅は花の兄とかや。春の風やはらかに吹て。里の中道溝ノ石をつたふ頃。まづ江ノ南の一二輪咲初て。白きは本ノ色といひながら。南鍬の寒き風情をこのむならむ。柳連ノ翹の黃色に。栄たね山吹のあたゝかにさけるは。かの大判の裸をうらやむか。鶯の金ノ衣ノ鳥とは。直に似せ金の同ノ類なるべし。きぬさらき二日の空は。まだ鴨の羽音ながら。日影うらゝかに。南の障子押やり。飛石よりかゆろふもゆる頃。かはらけのひねりもぐさ。誰にかすゆらんと。おほつかなく見なさる。風くろふたる惡太郎。小路がくれを尋出し。お乳めのととり廻し。あたり近き。やいとの婆々をかり招き。筋ノ違風ノ門すへられて。涙のかゝる饅ノ頭も。中

中それもうるさくて。やう〳〵膝をすべり落。からき命いきたる心地して。炙甕の芥子銀は。湯氣のたつまで握られて。何買ふ物とはしらね共。たゞ嬉しとばかりおぼえける。明日は初午とかや。錢數寄の稲荷殿。御簾の中より。千貫の散錢に。めでさせ給ふ。御物好こそ有難けれ。されば佛とてもいやにはあらず。黄金の膚を頭ひ。閻浮檀金を最上とおぼえ。極樂には金銀を鋪とかや。いづれの佛神に詣でゝも。錢箱の響にめでたまはぬはなし。世の中の人の。心の花にはゝつりやすく。奢は日〳〵に長じて。田舍の金銀は。すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所。南北の參詣事。すべて錢なし人は。一足もすゝみがたし。櫻は四方山にさきこぼれても。吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より。幾重の雲をわけつらん。此御山は。彌勒の代につかふべき金とかや。むかしより世の人の。面白しとおもふもとはりなり。やう〳〵やよひもくれて。ほとゝぎすの來べき。卯月の空打曇たる。片山里の垣根の雪は。何を卯の花とうらやみけむ。錫も鉛も。ともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさら也。世に稀なる紅とて。長安の豪富はもてあそび。これに魂をうばゝれける。その面白き所は。たゞ小判を植て。詠むるなるべし。雲雀は終日に囀り。水鶏はよもすがらたゝく。池鯉鮒野の馬市なるべし。一歩はひとつふたつなどいひならひけるに。馬買牛買の詞とて。五つぶ十粒とならべてかぞへ。伯樂が錢金を皆あてに。集りたる遊女野郎のたぐひ。簸ふり樗蒲一のより所にして。廣野の小屋のたゝずまる。しばし里あるこゝ地なるべし。はやし祭。喰ひ祭。打つゞき。桑子庭に起かゝる頃。茶山いそがしく。からし種こぼるゝなど。麥跡の田植さへおくれて。例の五月雨ふりつゞき。舟にて市に入る時。矢矧堤はきれて。道筋かはり。大井川とまりて。鳴田金谷に。陣を張大名小名いくかしら。猶行末の川〳〵。いかばかり出らんと心ぼそし。此時例の一歩小判のはたらきこそ。目さむるわざなれ。梅雨晴の六月空さえて。峯に雲をくゞ頃。植田沸かえり。天地は蟬の聲に鳴ひしがれ。一日の暑さもたへて。千とせをふる思ひなるに。十九土用とかや。京田舍熱病にたふれ臥。家〳〵わらはやみはやりて。水藥師の泉も。其功ぬるく。驗者のいのりもたへまある頃。紫雪とかや。世に良藥ありて。たち所に醒たり。これこそ黄がねの鍋にて。黄金を煎じたる物なれ。やゝすゞ風粟の莢むけに立初。芋の葉ぶりつく頃は。金氣世にお

こなはれて。星合の空もうち過。物ー際近づく頃。革羅布とびまはり。丁ー銀箱を出てうそぶく。奥の世の中打つゞき。巡ー禮のほりつどひ。金の直下る頃を。巡ー禮小判とはいふ也。家〳〵むかひ火燒ー捨て。魂祭ころ。旦那寺の小僧。棚經とてよみありく。物喰せ酒のませ。やがてかけ合に。一粒包みてやれば。またはづかしと思へる。いとあはれなり。やう〳〵生身玉。養父入事過て。躍見る心にはなりぬ。彼嶋原と申は。廿四日をかぎりと定め。世界の金銀は。此時この里にとらるゝなるべし。たゞ一夜さの假のにはひに心とゞまりて。これよりえにしの中立となるたぐひもあれば。釣がへといふはいかにぞや。こはき風。あらき日影をさへ。いとふしとおもふべき身を。いまいましく大秤にふらば。昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣り。家ー督をうりて。くはす貧ー樂の道ー樂ー人。つまる所は俳諧師也。いくとせか。松嶋象潟の旅をうらやみ。此秋しきりに。姨捨更ー科の月見むと。三ー衣ー袋に身ー帶をたゝみ込。木曾の御坂を越かねて。尾花のつてにまねかるゝ。かけ路の下の草枕。一ー夜二ー夜はもてなされて。長逗留に飽れぬる。ただ行さきの袖の露。ちらりと見せてあはれ也。秋もはや。くるゝと菊の名に立て。黄ー〻白ー〻粧ー東ー籬ーといふは。かれも金銀をうらやむたぐひか。時雨ふりそむる頃は。諸家の爐開きとて。名ー物の寶くらべ。風流に似て。金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より。野郎の顏見せ。給ー分は小判也。むかしは吉原堺町と打ならび。中なるがふき屋町。天下の金をとらかして。まぶといふ詞も。此時より出つらん。今朝からは師走とかや。乙子の朝ー日とて。節季ゆの來初る日也。空はうす墨の多氣色。比良の高根。志賀の山。むかし長ー等の峯の雪。都の方はあられふる。音羽の瀧の音もなし。嵐木がらし唐がらし。岡部の里の冬ごもり。何を師走の年くれて。金一段に實寄たり。かはせ小判。大名借。つゝみ廻して相坂をこえ。高瀨の舟のかぢ枕。汐ー路はるかにとられ行。鄙の旅寢であはれなる。神は人の敬によつて威をますとかや。伊勢熊野のお初尾(穗)時。藥ー代は銀ー枚。衣ー配は小判なるべし。すでに煤と明。餅と暮て。廿九日といふなり。けふは小の大ー晦日。一日の違ひとはいひながら。一ー年中の大油斷。今此時にあらはれたり。三千世界の金銀は。けふ一日の亂ー世にて。入みだれ〳〵。あたる所さはる所。皆とゞ〳〵くしたがへて。壽ー永も已に暮にけり。抑やまと哥は。神代より傳はりて。おもき國の瓔びなれば。天下誰と

あつてこれをおさむ。されど末の代にあたつて。和歌の道に對するものは金也。目に見えぬ鬼神をなかしめ。おとこ女の中をやはらげ。たけきものゝふの。心をなぐさむるものはこれ也。上一古はいやしきものにいひなされたる。それもさる事ながら。今やうは此ものににくまれたる人。此界にては。二日の逗留(トウリウ)ならず。たゞあはれなるは金なるべし。

賦

風俗文選 二

南都賦　攻都　鎌倉賦　許六
吉野賦　文世　松嶋賦　芭蕉
富士賦　嵐蘭　湖水賦　李由
前詹山賦　支考　後詹山賦　古来

風俗文選卷之二　五老井　許六選

○賦類

南都ノ賦

汝邨

○あをによしならの都は。御さぶらひ三笠山の麓なり。元明天皇。和銅二年。藤原の宮より。此京に移さる。大宮殿。大佛殿。佛神をあがめて。王法を輔く。若宮のやしろ。月日の宮。竈殿。尾上の宮。鏡の神は。橘の廣嶋をまつり。浮雲の宮は。鹿嶋立の始とす。氷室。卒川。東大寺の八幡。二月堂に若狭井あり。三月堂。四月堂。釣鐘は。久我の入道の詩をとゞめ。大門の折釘は。源の頼朝の幕を張。興福寺は。七堂伽藍。はじめは山階寺といひ。中頃は馬屋寺と號す。東金堂。中金堂。食堂。講堂。南圓堂には。補陀落の藤をうつして。順禮の札を納め。東圓堂には。いにしへの八重櫻を殘して。花垣の庄を領す。西金堂の樂をあらため南大門にうつして。薪の能をはじむ。七度半の使に。四座の猿樂をめす。雨天には紙を蹈で試み。夜陰には薪を積で焚。保生が鉢の木に。名人の號をとり。大倉が芭蕉に。達人の名をあらはす。水屋の能。若宮の能。春日祭。御祭。素絹に大衆の顏をつゝみて。大華表につらなり。錦を着て。松の下に弓矢の立合を舞。頭屋の兒は。牀木に腰をかけ。赤衣の仕丁は棒を横ふ。大名馬。大名鐙。大太刀持。小太刀持。競馬。流鏑馬。長谷川黛は甲冑を帶し。射手の兒は。綾蘭笠に弓矢を持。關白代は束帶して。藤の花をかざし。バヂョの兒は供つれて。腰に木履をつくる。ハイケンの神子。奈良の神子。細男。氷室付の樂人。トカミ。拍手は。仕丁の宿老。頭屋の御幣。田樂のビンゾロ。春は二月の雪をちらし。冬は霜月の花をさかす。手向山に。菅家の紅葉を詠じ。武藏野に。業平の若草をよむ。雪消の澤。野守の池。御手洗川。佐保川。一位。二位。五位の橋。馬出。轟。故郷の橋。鶯の瀧。青龍の瀧。森は神垣。手分の杜。地獄谷。千手谷。劔塚。逢火塚。むら雨のたえ間には。雲井坂に晴を祈り。雉の羽音には。わか草山に眠をさます。鹿は春日野に臥。魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳。良辨杉。夜泣の地藏。文使の地藏。元興寺の鐘は。鬼の手の痕になだれ。十三鐘は。七ッ六ッの間につく。角寺。紀寺。般若寺には。大塔の宮を隱し。何がしの坊には。義經の鎧をとゞむ。重衡は治承に燒。松永は永祿に亡す。俊乘坊の

跡をふむで。龍松院は願をおこす。爽懸石は。伊勢の御の眺望をなし。柳綠花紅の碑は。紹巴翁のしるしとかや。華原磬。泗濱石。蘭奢待の加羅。鴨の毛の屏風。柳生家の劍術。寶藏院の十文字。法花寺の作り犬。西大寺の豐心丹。法論味噌。力饅頭。なら漬。奈良酒。奈良こんがう。なら團扇。墨。曙。世に名高く。打箔。中繼は此京より起る。岩井が具足。文殊が打物。膠。綠青。紺。皷の皮。土風呂。灰炮烙。櫟。木練。なら茶はヤヂウと名づけ。實食を硯水といふ。油烟取。五合禰宜。乞丐坂の石。穢多村の木格子。赤き物は。頭屋の赤飯にたとへ。痩たる人は。金堂の鉦打といふ。木辻の待宵。鳴川の別れ。情に万金を盡し。思ひに一命を輕むず。口は七口。景は八景。町〳〵に御門の名ありて。五條三條の巷をわかつ。夏冬の朝起。春秋のなりはひ。諸國にすぐれ。諸人にこえたり。是皆舊都の。ありがたき遺風なるべし。

鎌倉ノ賦 并序

許六

夫相摸國。鎌倉は。郡の名にして。大職冠鎌子丸の時。靈夢によつて。鎌を埋むの地也。このゆへに郡の名とす。染屋の時忠。惣追捕使として。文武の御宇より。聖武の神龜年中まで。こゝに居す。それより上總介平直方。これに住して。八幡太郎義家朝臣より。源家代〳〵居住の地なり。賦して曰。

○三代の將軍。九代の執權。春の花さけば。秋の紅葉と變ず。柳のみやこ。もろこしの里。鶴が岡。雲井の嶺。下の若宮は。賴義朝臣の建立にして。上の若宮は。源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立て。民の戶烟にぎはへり。江の島は。三辨財天。三浦三崎に。杜戶の明神あり。鳥合が原は。相摸入道が鬪犬の地。由井の濱は。下河邊の庄司が。笠懸を射初る。小袋坂。稻村が崎。七里が濱。月かげが谷には。曆を作り。扇が谷には。佐竹の紋の畦あり。腰越の寺には。辨慶が申狀の下書を殘し。兒が淵には。白菊が最期の歌をとゞむ。片瀨川には。宗尊親王の影をうつし。滑川には。青砥が錢を搜す。日蓮盛久が首の座。景淸からいとが籠のあと。大塔の宮は。佞臣の讒にくるしみ。實朝の卿は。公暁が爲に弑せらる。勝長壽院には。義朝の髑髏を葬り。法花堂には。賴朝の墳墓を築く。西行上人は。三夜に軍法を說。定家の卿は。七年和哥を談ず。化粧坂は。少將に名高く。神前の舞臺は。靜が舞をはやす。和田。畠山。千葉。北條。官(管)領屋敷。梶原屋鋪。佐〻木屋敷には。馬ひやし場の水あり。正宗が舊跡には。及をきたふ泉を見る。

花が谷。蛇が谷。梅が谷。松葉が谷。建長寺。最明寺。圓覺寺。壽福寺。海藏寺は。石割玄翁の開基。松が岡は。實朝の尼寺也。籠釋迦。鉄地藏。深澤の大佛。長谷の觀音。金洗澤。星月夜の井。橋の下の小哥は。あめ牛めくらが威勢をそしり。小栗の說經は。横山が强盜を語る。阿佛。長明が日記。重衡。俊基の紀行。春は雪の下に花を蹈で惜み。夏は山の内に鵑を待て眠る。美奈能瀨川の月。御輿が嶽の雪。礎のあとは。感慨の情をまし。鳩の聲は。懷舊の腸を斷。鰥は兼好が筆にいやしめ。左時の榮螺は。實平が亂相を殘す。苔。磨砂。海老。柴胡。すべて魚鼈の類。あまかづき（あまがかつきカ）いとまあらず。高瀨おしをくり。かよはぬ日なし。名にしの地藏は。武相の境にして。六浦。金澤は。むさしの地なり。瀨戸の明神には。四橋一覽の眼をさき。能見堂には。八景惣詠の詩を見る。照手の松。筆捨の松。金澤の文庫といふは。稱名寺にあつて今はなし。文殊像。普賢像。こく梅。櫻梅。せいこ梅。青葉の紅葉。わづかに西湖。さくらの二梅をとゞむ。大きなるものは。賴朝のかうべにたとへ。廣き所は。かまくらの海道に比す。今の戸塚は。いにしへの材木町といひ。大磯の宿は。遊女町の沙汰なり。されど東南に海近く。西北に山つらなれり。境地狹してすでに谷〳〵の號あり。むかしの繁花繁榮を論ぜば。なんぞ今の泰平不易の江戸に及ばむや。

吉野賦

文　艸

○よし野を御吉野といふは。皇居の地なればなり。山。川。里。嶺。嶽。高根。尾上。山の井。花園を詠ず。すべて二十一代の歌數三百七十余首。猶家〳〵の集。物語類。詩連俳諧のたぐひ。佐川田喜六があさな〳〵。貞室老人のこれは〳〵まで。かぞふに中〳〵いとまなからん。さればもろこしの吉野とは。おほいもうちぎみの誹諧の歌より始り。芳野川花の音するとは。慈鎭和尙の大きなる歌の手柄なり。川は巴が淵よりわかれて。紀の和哥山に落。山は大峯よりつゞきて。那智高野につらなれり。藏王堂は。三ところに安置し。一郡は八郷とかや。上市よりは飯貝にわたり。下市をこえては。六田よりのぼる。妹背山をへだて。高取の城にむかふ。ちもとの櫻。日本が花。櫻田の谷。さくらが嶽。關屋の花。瀧さくら。雲井櫻。布引の櫻。花矢倉。花籠の水。嵐山は。龜山の御宇に都にうつされ。袖振山は。天武帝より五節の舞を始む。清見原の天皇は。國栖人の舟にかくし。後醍醐帝は。吉水院を皇居に定む。義經も

此院にやどり。秀吉も此寺を本陣とす。賀名生は要害の御所。如意輪寺には御廟を築く。厨子の戸びらに。南帝勅作の詩を。みづからあそばし。過去帳の奥には。柿正行最期の歌をとゞむ。判官の鎧。辨慶が太刀。口の山門は。彦四が痛腹の所。つゝじが岡は。忠信が空腹の地なり。勝手の賓蔵には。静が舞の装束を納め。子守の拜殿の歌仙は。定家卿の眞蹟（俠上の後鶯野永徳）。櫻木の宮。金情の明神。力乞の不動。廻り地蔵。尊算の御影堂には。花供養の餅をまき。五蓋寺。櫻本は。當山の先達也。大瀧。宮瀧。西河の瀧。高瀧。蟬が瀧。清明が瀧。栄つみ川。とく〳〵の清水。外象の橋。神子の水。鶯の尾の鐘。龍返しの岩。龜石。玉石。大杉殿。人丸塚。若葉の鳥井。鎧懸の松。かけろふの小野。猿引坂。琴堂。琵琶山。青根が嶺。釋迦が嶽。七十二なびき。八十の窟。これ皆順逆。二つの通路なるべし。産は頭巾。ほらの貝。火打。塗物。紙。漆。葛。櫃。たばこ。釣瓶鮨。柿。木の子。籠細工。木鉢。材木。山折敷。さくらは吉野に名たかく。よしのは櫻にて名を擧たり。麓より奥の院まで。左右の山〳〵。前後の谷〳〵。たゞ雲を攀上り。たゞ雲をくだるがごし。海道の吹だめには。落花の波を揚。木の間の嵐は。寒からぬ雪をふらす。麓ははやく。奥はをそし。開落山の淺深によれり。春此山に上り。いづれか花の盛ならぬ所はあらじ。夫櫻の名目は。伊勢櫻。江戸さくら。火櫻。樺ざくら。うば櫻は葉のなきをいひ。しほ籠とは濱に咲といふ事にや。熊坂といひ。楊貴妃といふ。世に色よき杜若は。八橋と名付。よく垂る萩を。宮城野と號す。さればむかしより。たゞさくらの名に。吉野といへる花をきかず。たゞ吉野とも櫻とも。理屈をつけぬこそ高みなれ。

松島賦

芭蕉翁

○そも〳〵事ふりにたれど。松嶋は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峯。數百の嶋〻。欹つものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり。三重にたゝみて。左にわかれ。右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛するがごとし。内ふたご。外ふた子。鎧嶋。かぶと嶋。牛嶋。虵じま。内裏嶋。屏風じま。笹が嶋はあまの小舟漕つれて。肴わかつ聲〻に。つなでかなしもとよみけむ俤を殘し。末の松山は寺となりて。松のひま〻〻墓を築く。羽をかはし。枝をならぶる契の末も。終には皆かくのごとし悲し。野田の玉川。沖の石。宮城のゝ萩。武隈の松。

猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には。塩がまの明神あり。神前のかな灯籠。文治三年。泉の三郎寄進と記す。雄嶋が磯は地つゞきにて。雲居禅師の別室のあとに。坐禅石。瑞岩寺は。相摸守時頼入道の建立。當時三十二世のむかし。眞壁平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して。七堂伽藍となれりける。法華寺は。海岩に峙。老杉影をひたし。花鯨波にひゞく。松の綠こまやかに。枝葉汐風に吹たはめて。屈曲をのづからためたるがとし。其氣色宵然として。美人の顏を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山ずみのなせるわざにや。造化の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さむ。

富士ノ賦

嵐蘭

○不二は日本の澤萊山也。むかし孝靈五年。山はじめて現ず。徐福も此山に登りて仙藥を求め。かくや姫も神と化してここに靈をとゞむ。峯は八葉にわれて。根は四州にまだかる。道路は三口よりのぼりて。千筋にわかれ。すそ野は東一西に長して。百一里につらなる。形けづりたるがごとく。高き事北一斗に近し。夜一陰に旭をかゞやかし。夏一天に雪をいたゞく。山一間に海をたゝへ。山一上は眞一砂を攀。和一國異一朝類するものなく。三一國名一山と稱じて。霞楚六帖に甚ほめたり。日本武尊は。東一夷をたいらげて。草薙の名をあらため。右大將頼朝は。ものゝふをあつめて。牧狩をかる。鳴澤の池は。俊一成の仇名をとり。人一穴の奥は。仁田が無分一別さうなり。十郎の宮。五郎の社。西行は五文字をすへかね。探幽は墨一色にあぐむ。烟は古今の序に。二一流によまれ。雲は廻船に怖れて。一尺八寸の號をとゞむ。禪定の人は。賣冠に頭をつゝみ。下一向一道は。小袖の砂をふるふ。絶頂の鮫。半腹の雀。巣鷹は大心にして。伊豫の松一山におとし。水一鳥の羽音には。臆病になつて。都の方に逃る。ふじ海苔。不靈灰。富士甘艸。ふじ黄芪。栗。栃。松。檜の木のたぐひ。往還は竹の下越。根原ごえ。關は足柄の關。横ばしりの關。あら井の渡口。佐夜の山一越。海を隔。峰をかさぬ。三保清一見一寺の見越。筥根。鎌倉の姿。日一本。兩一國の橋一上には。馬一上の人の首をめぐらし。赤坂。駿河臺には。乘物の窓に眸をさく。遠くは朝熊山をかぎり。ちかくは原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には。倒の影を浸し。甲一州の府には。三つ峯に見えて。扇の繪はこゝなるべし。むかしより、詩一歌連一俳の句一數。合せてこれをつまらば。大かた此山の高さには比せむ。されど古今

の間。たゞ一首秀たる者は。赤人の白妙なるべし。其余は此山に對して。万が一にも及ばず。吾翁。冨士吉野の句。一生なしとかや。東路に趣く人は。かくなりがたきふじの詠に。心力を費し。又あづま路におもむかぬ人は。かく有難き冨士を見ずして。一生を終るも。共に殘多き事なるべし。

湖水賦

李由

○近江。もと淡海なりしを。大宮にちかき江とて。近江につくり。遠き江を。遠江と號するとかや。仁皇十二代。景行の御宇。滋賀の郡に。遷都あつて。高穴穗宮に行幸す。三十九代。天智帝。大津の宮にうつり。廢帝の御宇。保良の都をたつ。近州はじめは十三郡。保龍潤澤。種千倍を得。春氣早く到。日本四番。大上ゝ國と稱す。仁皇七代。孝靈五年。地裂湖となる。同時冨士山現ず。されば不二禪定するに。近江人を先達とさだむ。善積一郡は。已に湖となりて今はなし。わづか磯といふ一村殘り。古郡變じて。坂田の新郡に屬す。同國余吾。筑摩江の兩湖あれど。大きさわづかに二里に過ず。たゞ日本みづうみと稱する物は。琵琶湖の事也。形似たればとて其名とす。佐ゝ波實國とは。風土記に出て。樂ゝ波や丹穗てゝの文字は。萬葉よりはじまれり。東西十里。南北二十余里。山谷のしたゞる所。八百八川。湖を圍む水郷五百余村。中に大小の嶋あり。竹生嶋は周廻一里。寺院九坊。天女をあがめて。岩つなぎの神事あり。空海の祕密を封じ。經政の撥をひびかす。武嶋はつくぶの半にたらず。沖の嶋は。沖津嶋山とよめる。漁人わづかにすめり。白石といふは。四石湖上に峙。樹木一株もなし。奥の嶋は。人家數百。疊の表を產とす。猪崎。岡山。黑津の八嶋。なら島は水鳥の巢つくり。勢田の中嶋には。蛇柳あり。入龜。出龜の二嶋は。筑摩江の中に浮ぶ。山は比良四明の翠をひたし。鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田。青柳の橋。松は辛崎。千ゝの松。蓮は支那に名高く。蓴菜は四川に肥たり。柳大根。兵主無。八幡蚊屋。長濱絹。高宮布。野洲ざらし。高嶋硯。武佐墨。白部石。舟木材木。庭石は木戸によろしく。盆山の數砂は大洞の白石。晏寧石也。伊吹の產は。蕎麥。からみ。艾。石灰。藥種の類。すくも。岩木。日野椀は會津の根本。しがらき燒は高麗の藥也。混元丹。百ゝ藥。幡磨田米。醒が井餅。多賀扨子。繪村鍋。四十九張のきせる。池の川縫針。守山鞦。國友鉄炮。武佐判の八合

升。是レ堅ー田野ー家之ー聖。端無のヂバン。佐ー々ー木軍ー中兵ー殺ノ助トス。家ノ其ー是傳也。其子孫ノ者ノ。聞父マテ于ー今絶シ之。大ー津馬は飛彈材木を飛し。鎌ー倉の生食も。本此國より出たり。湖ー中の獵ー頭は。尾ー上片ー山に綸ー旨をいたゞき。石垣つきは。阿野犬を天下に用ゆ。白髭の御神は。湖水七ー度の芦ー原を見給ひ。磯ー崎の明ー神は。日本武の御ー廟也。多ー賀。日ー吉の神ー社は。しらぬ人なくして更なり。筑ー摩の神は。鍋の數に名高く。新羅の社は。源氏の大將より。威を益とかや。大津四の宮の神ー社。今ー濱の八ー幡ー宮。豐ー滿の神は。幡ー竿を守り。宇ー智野の神ー明は。第十ー四ー座の迁ー坐也。彦ー根ー山の天ー神は。幾津彦根命と申奉る。金ー德の御神なれば。金ー龜ー山に迹を垂。吾すむ平ー田ー山。鳴ー宮の天神は。御ー旅ー所也。流天ー神は。天津彦根命なり。木ー德の神にて。千ゝの松原に宮居し給ふ。名は神ー代よりはじまりて。大納言經信。贈ー答の歌にも。彦根山とよめる也。山ー上の觀世音。堀ー川の御ー宇。寛ー治三年。白川の上ー皇。御ー寺の地也。神ー社佛ー閣。金ー龜ー山の城の爲に。地を移して。今の北ー野寺に同ー坐あり。石山は觀音道ー場。石は白瑪ー瑙。山は黄ー金なり。皇ー州金ー山の始り。三ー井は園ー城ー寺。鐘に名高く。むかしながらの山ともよめり。夫山といへば。延ー曆ー寺にはまり。寺といへば園ー城ー寺をさす。共に押出したる霧ー場也。坂ー本西ー教ー寺は。天ー台淨ー土の一ー本ー寺。堅ー田の浮ー御ー堂は。惠ー心僧ー都の千ー躰ー佛。長ー命ー寺は。順ー禮の札に顯れ。猪ー崎の不ー動ー尊は。棹ー飛の術に名高し。矢ー取の地ー藏。木の本の地ー藏。石塔ー寺には。天ー竺阿ー育ー王の塔をとゞめ。是所ー謂八万四千塔ノ一ー也。日ー本ニ來ー止。三ツノ其ノ一ー也。平流山は。行ー基四十九院をたてゝ。都ー卒の内ー院を移す。三ー國傳記ニ云。持ー鬼ー神ー酒ー山ノ一ー峯ヲ盜ミ。湖ー水ノ酒ニオロス。其ー下ニ隱レテ石ト化ス。今ノ鬼ー神ー山ノ蛇ー石是ニナリ。高ー野永ー源ー寺は。寂ー室派の一ー本ー寺。女ー人の高ー野ー山になぞらへ。番ー場の辻堂は。一ー向時ー宗の源にして。仲ー時已ー下の過ー去ー帳よりは。如ー是畜ー生の願ー文にてかくれなし。百ー濟ー寺の下ー乘は。小ー野ー道ー風の眞ー蹟。池ー寺の八夫の繪は。金ー岡の筆ー也。正ー樂ー寺は。佐ゝ木道ー譽が菩ー提所。コンクハイの狂ー言。白ー藏ー主が寺也。敏ー滿ー寺般若坊には。那須與市が願ー書をとゞむ。野ー寺の鐘。練ー貫の水。松ー尾寺の本ー堂は。飛ー彈の匠が建ー立。千ー年の星ー霜をかさね。瓦ー屋寺は。太子。天ー王ー寺の瓦をつくらせて。其殘り此地に埋て今もあり。東ー西本ー願寺の御ー坊。院ー家一ー家の寺ゝ。清ー凉ー寺。龍ー潭寺は。禪の道ー場。窓には千ー嶺の雪を含み。門には万ー里の舟をとゞむ。菅ー山寺は。世に菅の寺といふ。菅ー家の遺ー愛ー寺也。安ー土山總ー見ー寺は。信

長の城跡。日本天守の始り。七重の蠣を聳かす。廣間の名額。此寺に殘る。

・觀音寺は。佐々木の城山。すなはち觀音城也。今濱の城は、太閤秀吉の。城の持初。坂本の城は。明智光秀が終りをとれり。俵藤太のながれは。蒲生家に殘り。六角京極は。佐々木のわかれなり。稻毛三郎は。供御の瀬を知て。多勢を渡し。賤が嶽の七本鎗は。後代に名を擧たり。木の匠の豐後は。甲良の庄より出て。道を坂東に傳へ。鍛冶の貞宗は。高木より出て。名を鎌倉に揚たり。猿丸。黑主の舊跡をとゞめ。僧元政。芋吟翁。皆此國の產也。すべて歌名所。一百余ケ所。猶撰集に殘るものすくなからず。近江八景は。騷人墨客これを翫ぶ。これ近衛政家公の歌をはじめとす。國中土に灰汁なく。水に泥なし。音聲に清濁をわかちて。うらの言葉をつかふ。桑によろしく。又茶に宜し。世に川魚といへる物は。湖魚の事なり。汐ならぬ海士のいとなみもをかしけれ。大網。卷網。四手。跡懸。手丸。唐網。魞。簗。カリ〳〵。竹瓶あさり。いさりのあはれもふかゝるべし。鯉。鮒は惣名にして。鯉の品類。鮒のたぐひ。其名かぞふにいとまなからん。春は山吹の子をいだき。秋は鱸に紅葉をちらす。江鮭。鱒の名を變じ。鰌。鰻の味をわかつ。取よき物は鮎と名づけ。鮗は王城五十里を去ずとかや。勢田鰻。和爾鮫。氷魚は近江にかぎる。内藏式云。田上ニ敢沙汰ルヲ。字治ニテ收。九月ヨリ十二月マデ供之ヲ氷魚ヲ捕モノヲ。鱒代上云ナリ。不賀比。鮗ノフト。鰐ノカト。增ノヒ。鮎。小鮎。鮠。水鮭子。山水鮭。ギヽ。鰕。蟹。小鰕。蜷。蜆。胴。龜。石龜のたぐひ。獺は魚を祭り。川太郎は相撲を好。船は大津百艘と稱す。八十の湊。津〳〵浦〳〵。大丸子。小丸子。小ばや。川御座は大名船。高瀨。傳馬は川舟なり。段平に大石を積。艣は耕作のたすけ也。准ス肥ノ舟ニ不ン入ニ舟數一。棚なし小舟。堅田舟。比良の八講は。舟入湖上の風をおそれ。論義とは。風のさだまらぬをいふ。トイテとは。日和風。ハヤテとは。雨をさそふ。勢田嵐。伊吹風。ヤマせ風。ナガせ風。サキ風は春夏の名にして。秋冬は日あらし也。根わたしは湖上の風の名にして。宮內卿は漕行舟をながめ。臥佛老人は。路縱橫と吟ず。眞野の鶏に袖をぬらし。山吹の崎にはこ鳥を聞く。万木の鷺。老曾の時鳥。鶴。曰鳥。鵜。水鶏。鹿は玉川に啼て。百足は三上山をまくとかや。玉の濱の郁子を獻じては。新米の供御を備へ。在土の藤咲ては。藤堂家に花を捧ぐ。栗本の栗の木は。神代の沙汰にして。花

澤の花の木は。今も咲なり。龍ー灯松は。巳待の夜ー毎に光をあけ。大藪の雨ー夜には。星鬼の火を鏡にうつす。抑江ー州八ー十ー余ー万ー石。皆此水にやしなはれて。年ー〻の貢を備。大ー平ー曾の稲穂を奉るも。たゞ此湖の潤ひなるべし。

前塵ー山ノ賦

塵ー山蓼丸ー山也。在二肥ー長ー鯛ー武蘭之地ー也。

支考

○七月十日。けふは二ー万五ー千ー日の功ー德とかや。殊に女ー心の賴をける。物ー詣の日なるべし。此津の遊女どもの。人も見。人にも見られむと。よそほひたちたるに。ゆき〻の追ー風に。心ときめきせられて。花ず〻きのなびき合たる野邊は。男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮ー草の世にうかれて。身をあだなりと見る人は。浦の見るめも。いかにあだならん。今さしあたりたる物思ひはなけれど。左ー右の桑簾ごしにのぞかれて。顏のをき所なからんこそ。うたておもはるれ。禿といふもの〻。何心なくて。茶漬喰たしと思へる。雀の花見顏にもたとへ侍らむ。をひさきいかなるあだ人にか馴て。物思ふ事もならひてむと。これさへあはれにおぼえられける。

〽草花の名に旅ねせむ禿ども

去來

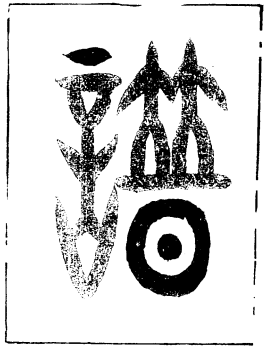
後塵ー山ノ賦

○十日八日は。たふときちかひありて。ちかき山ー寺に佛をがまむとて。こ〻の遊女ー共の。月まうでするなり。唐ー土舟も入つどふ湊なれば。浦人の氣色さへうちさはぎて。秋風の折にふれては。葛の葉のうらみがほに。磯邊の鴈の大ー空に吹なされて。そゞろに人を思ひ驚くならん。それが中にも。はかなき世をちぎり。諸ー共に苔の下になど〻。一すじに。祈りおもへらむ人もあるべしと。あらぬ心さへ取そへられてかなし。見渡したる人〻の。をのが國びゐきに。物くらべしあそばむにも。難波の浦の。あしさまにはいはぬをと。ひたすらにあまの子の。あさましとのみ思ひあなづりて。都の商ー人も。手ー袋ひきたるためしおほしとかや。か〻る事などはいひたるべき。年のほどにはあらぬを。西ー花ー坊に。此ながめの賦つくりたりとほめかされて。終に後の賦のぬしとはなり侍りける。

〽いなづまやどの傾城とかりまくら

（この二篇共に支考の『梟日記』にあり）

鼠賦　楊雄豆賦　閑居賦　附譜　百鳥譜　山水譜
書畫　漢賦　文選　四愁廬賦　攷樹　百蒐賦　李曲　支考　許六



風俗文選卷之三　五老井　許六選

○賦類　附譜

鼠ノ賦　并引

去來

此賦以二五一音相一通假一名一字一爲ノ韻ト

鼠。一ッの名はよめが君。又よめともよめり。其たね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして。大なるは五六寸。ちいさきは寸にみたず。山椒の眼。小豆の鼻。齒は糸をつけて小袖も縫べく。耳は木の芽のめだつに似たり。尾をきつて錐のさやとなさばなしてむ。背腹の色にめでゝ。うすくも濃も染出せり。其行や。夜出て晝隱る。常にぬすみをもて身を養ふ。まとににくむべきものゝ一つなり。乃賦を作りて曰ク。

○二月鼠の穴を塞ぐ。つくゝ汝がいたづらをおもへ。家に居て人をおそるゝは。足のうらに疵持けらし。油をのむ事。世の酒にひとしけれど。いつしか沈一醉を見す。粟を盡し。器をそこなふは。殊更にいはじ。大一蜜をかむ牙にふるれば。病を生ず。はづかしき文をちらして。男一女の中をもさまたけ。あやしき巢をつくりて。源平の亂をきく。何をへつらひて。佞一人のためしに引出られ。いかにすゝめてか。書を焚代の宰一相となしぬる。神一佛のたふときも。尿一糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は。俊成卿のうらみなりけり。つくゝ汝があやうきをおもへ。それ人の賢しきや。万木墻をまき吹一矢を儲。鏑をぬりて。往一來もたやすからず。けはしき城をたのむとも鼬を

防ぐ手段はあらじ。㉑杳なる空をながめては。鳶のつかまむ愁わするべからず。㉒桁走り。障子のほり。早業得たりがほなるも。おもはず升にかゝりて。いかばかりの思ひをすらん。㉓虚死仕て仕合に。東坡が袋を逃たりとも。生捕れてなまなか。張湯が文をうけなむ。㉔或は命を頸にさゆて。兒童の戯となり。あるひは筆の用に髭をぬかれて。老の悔を残せり。あやまりて畫鼠とあなづられ。孺鼠と笑はれ。更に吹鼠とくるしみて。人の爲にぞ悦ばれぬる。㉕我さへかなしきを。㉖鼠となりて。狐狸の命とらむこそ。あさましく罪ふかけれ。㉗つくづく汝が尊きを思へ。日よみの初に呼れて。位司いやしからず。㉘百敷のかしこきも。甲子をむかへて。年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立かへれば。子の日の御賀あり。子祭といへるは。いづれの長者の傳へなる。㉙からの日本の歌にもよめり。㉚海原や。もしほの陰に友なふなまこは。海鼠とかゝれ。㉛秋風の尾花がすゑに妻こふ鶉は。田鼠の化したる也。㉜烏羽玉の闇き夜は。いかづちともなれり。㉝象といへる獸すら。かつ恐懼ぬる。㉞麝香鼠は筑紫に住なれて。こと國に行ず。㉟かづき姿のわかやかなるは。嫁入の繪虚事にぞ。㊱どこの乙子を七郎とは申す。㊲新左衛門とつけるは。さかやきすりての後なるべし。㊳大ねら小ねら。㊴將廿日鼠と名のり。㊵月〳〵十二の子をうむ。誰が家にかとりつくし得む。㊶もし白子出て。福の神にや愛せられむ。㊷汝が隱里はいづくのほとりぞや。㊸武藏野の鼠穴にや。㊹出羽の境の鼠が關なるか。㊺信濃の奥の鼠宿なるか。㊻目出度身をもて。かり初の世をむさぶる。㊼などか歸らん事をおもはざる。㊽窮鼠かへりて猫を嚙の志ありとも。三井の賴豪が。千一疋のいきほひすら。本意を遂る事は。猶きこえざりけり。㊾

旅ノ賦 并引

許六

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見残しは。皆誹諧の情なり。我翁。白川の田植歌を聞初。奥羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕涼には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて。七百三十余程を吟ず。曾良が萍髪の力量を感じて。一鉢の飯を分て。風流を盡さる。ひとひ芭蕉庵をたゝき。繪の雜談に及ぶ時。予に旅十躰の繪をかゝせて。讃じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ。狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道。草枕の類に

はあらず。

「旅-店のさま。上-段に書院床。釵菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて。門-口の入-湯-桶。かたぶけて居たり。底に小-砂のさはるは。夜べの殘りもいぶかし。出-女のたて縞は。春-秋をしらず。根太板-敷は落て。隅〻まで疊とゞかず。天井襖は。雨もりにきはづき。鉄行-灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢賣。草-鞋-賣にせがまれ。やう〳〵に枕をかたぶけ。心よき寐-入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出-立は七つといひふくめたるに。旅-人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

「大名の寐間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ。船-頭の胸づくしをとり。駕籠廻しをたゝき。馬さしとつかみ合。一-僕の跡にさがるをねめまはし。鷄のなかぬに。つれの男を起し。挑灯とほして。夜-道を行を手柄とし。入-湯の一-番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯-葉に雨のはら〳〵といふ前に。

「世話やきの友にあきたる旅の宿といふ句も。此情にかなへり。

「海-道の賣-物に。餅-酒のなき所もなし。磨-針-峠の餅をくはねば。未-來焔-王の前にて。からきめを見るといへり。寒-天にも冷素-麵をすゝむるは。逢坂の茶屋。饅-頭のほか〳〵と見えたるは。見-付の臺也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ。錢の看-板は筒をかけたり。昆蒟の田-樂は。何ものゝ喰けるぞ。

「乘かけに春の密柑や宇津の山

「舟川の上。馬駕籠の情。しば〳〵かぞへがたし。五月の大水も。かり借の手形に書入。おのが草の戸は流るれど。首だけの借-錢を納して。しばらく息をつぐものは。嶋-田金-谷の賊なり。水の淺-深を何文川とこたえたるは。大きなる酒-落也。天-龍の中の瀨は。馬-人足を空にまどふ。乘-人は股だけ入て。荷を肩にかけて待。あがるものは。負れ支度して舟端に立。旦那が鑓をかたねたるは。渡し場の情也。馬-士駕-籠-舁は。輕-重に日-月を送り。一-盃の酒に。浩-然の氣をやしなふ。一-生を漂-ゝ鹽-〻とすまして。雲-介の號を蒙り。炎-暑の日も。玄-冬のあしたも。榎の木の下に眠て。蟻の都に到。終に飲-喰を座敷につかず。汁かけて出す馬-士の食と作られ。小-便ははしりながら。吸がらは手の裏にはたき。錢は耳の穴に納め。金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名殘も暮て。世にある人ゝのとぶく月-日を。出替の季と定めけるは。世をやすうをくる人にも似たり。

〜出女も出かはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ。あはれなるためしはおほけれ。獨り坊主には宿をかし兼。同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝。霙の夕暮に。情ふかきあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしがみ付て。しばらく足を休れど。極めの札場より追おろされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携て。あゆむべしとも見えず。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけうとく。懷中のふり藥は。やう〳〵急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は。路頭に倒れ臥。片目なる肝煎に追たてられ。老僧の愍みにて門下に入。おとろへかさなり。終に黄泉の下に赴く。かねて何國の土とならん。終をしらず。犬走の土中にこめて。年の齡。衣類の摸樣を小札にしるされて。何國のいかなる人と。いふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尋て。我子の古墳にのぼる。今來古往の人。旅懷の情を盡して。風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて。二たびみちのくにおもむき。不二都鳥の二句を求めて。すみやかに故郷に歸る者は。貞室老人なり。東海道の一すじもしらぬ人の。風雅におぼつかなしといはれし。翁の聲耳の底にとゞまる。

揚揮豆賦

毛紈

○赤小豆殿の能には。一に俵に納り。二ににつとあかふて。是よりあかの仇名を取。初春の粥には疫をのぞき。卯月の空の牡丹餅。うるはしき名目を略して。今樣のいき過は。ほた〳〵とのみひならはし。歌よむ人は。秋の夕のあはれなる名を好みて。萩の花とめされてより。俳諧の人は。隣しらずともよむなり。饅頭の唐韻めく時は。アンとよばれ。學のつよき物識のこびる時は。赤飯ともいふ也。深更とは。理屈人の名づけたる名にして。あかつきと解謎なるべし。蕪蕓亭に君臣の義を盡し。七歩の詩は兄弟の情を述。從兄弟煮。不死汗の名は。いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又あや折の竹にからめき。張皷の糸につながるゝも。かれが中の一つの遊なり。嫌となれば大きに嫌ひ、好に逢ぬればおほきにすく。かゝる堪能を持ながら。頓の料理に煮かぬるは。いかなる小豆殿の御分別かおはしけむ。

四梅廬賦

僧李由

○恙を怖れたる時は。窩に住居し。氷の

雨の用心とて。岩窟の所〻に殘りたる世もあるに。廂に孫庇をおろし。下側にしころをつけて。民の竈の賑ひける社めでたけれ。堅田の蜑の舟に年を重ね。乞食は橋の下に子を産たぐひ。鶯の巣のやさしく。烏の巣のふつゝかなる。皆おのれ〳〵が生得なり。ことしの秋。予ひとつの巣を營む。燕の土をはこび。蟻の塔をくみて。四根の梅をたより。頰白の家をかゆるたぐひにはあらで。病鶏が塒に憑む。鳳凰の威をふるはむよりは。凡鳥の嘲りなからん事をよろこぶ。山鳩が逸物の麿と吹上るゝも心ぐるしく。たゞ一日の閑鷗とおほえて眠る。蝸牛の釜打破らむとせがまれては。又出て蚰蜒の部とのらめく。鮑の貝の半造作。榮螺の蓋の戸もつらぬ住るながら風雅の友の入亂れ。賓主寄居虫の家をわすれて。例の夜鷹の寄合よと。はやされてたのしむのみ。

閑居賦

汶村

○廬山の雨の夜に月をしたひ。たれこめて。春の行衞しらぬ住るもあるに。よしや吉野〻奥は住うくとも。うき世の嵯峨のさがなきよりは。中〻すみまさりけめ。栗栖野のおくの。菊紅葉の閑伽棚も。柑子の垣に見おとされ。宇治山の隱レ家には。梅柳の風流を爲れど人喰犬にさめたり。花は一もとのさびしきをうらやみ。水はとく〳〵の雫をしたふ。秋は東籬の下をめぐつて。脊の底をきらし。冬は西嶺のさむきを望て。笠の重さをわすする。茶粥糊粉の輕みに。五臟を沙羅し。紙子背身のさびしき音に。千石をかへたり。詩は三籟の趣をさとり。歌は山家の風を好む。手桶一ッ。鍋二ッ。疊三畳米四五升。手鼻の拍子をおほえて。紙のたくはへを忘れ。自剃の自由を得て。耳の危きをのがる。壁一重に市聲の喧しきを隔て。簾一枚に車馬の埃を避たり。世を捨。世に捨らるゝ類。まつ事もなくて明しくらす社。まとの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに。食には八珍を盡し。酒には五味をたしむ。摺板の障子には。四季の花鳥を彩り。皮付の柱には。樟ふくらの名木を求む。額には花紺青の文字を彫め。軸にはきれ人形の箔を光らす。窪き所には水を湛へ。高き所に亭を築く。琴三味線の夕。小歌淨瑠璃の曉。隣家の眠を覺し。行人の足をとゞむ。粉白く黛なるもの屋をつらね。帶廣く袖長きたぐひ廊をめぐる。牡丹芍藥に數金を費し。蘇鉄海石に財をついやす。伽羅は交趾をくべて蚊ふすとし。燭は會津をたてゝ。月の光を奪ふ。或は地黄

枸杞子を植て。地子をつぐのひ又は瓜茄子を作。て。八百の店に出す。夕顔の借屋に。隣の生業を語らせ。柑類の菓撰には。錢の算用を聞。これらの閑居も。彼清貧の閑居と名を同じうせむや。聖人いへる事あり。小人閑居して不善をなすとは。此閑居の見通しなるべし。

招魂賦

支考

○西方の吾翁の魂あり。行ていづこにか歸ざらむ。たましゐ速に歸來れ。ことし神無月十日あまり。湖南の舊草に。門人あそむでたましゐをまつ。またばなどか歸り來ざらむ。たましゐそれかへり來れ。柴門に春の花ちれば。鳥鬱きて別をうらむ。蓬窓に秋の月落れば。人荒て住ずなりぬ。さればすみれ草の住よき世中に。何に卯の花の垣ねとはよみけむ。時鳥の行衛なからむにも。春の鴈の終にかへらずやあらむ。しからばたましゐいづこに行としてか。還るに道なからむ。還來れ〳〵。王孫むかしは草とおひぬ。靡蕪の香いまや衣にみつらむ。まして花薄の穂に出てよ。まねかばなどかへらざらむ。魂すみやかに還來れ。東花坊は。此日のあるじまうけせむに。かの蒂麥切は。宇津の山道の細き手際にはあらねど。むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ぢかく。菖蒲は黑津の里の名にしあへり。いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜をふるは。菓やゝかうばしく。瑪瑙の氷をふくめるは。酒更にみどり也。香花なをさばかりならむや。魂まづ歸り來れ。たましゐ何にかあかざらむ。さゞ波や。打出の濱のむかしおぼゆらむ。水渺〻とながれて。山更に長し。長等の山の山櫻も。たゞ春のあだなる物にさきちりて。志賀の古びぞ年〻なりける。かの辛崎の松の孤のみ。花の朧のちぎりやはわすれむ。殊にあはれむべき比良の高根は。入江の駒とむべき人こそなけれ。むかし堅田の。秋の夜寒に落ては。病鴈の旅ねに。其身を佗しか。其後のたよりはきかずなりぬ。さるは水ぐきの岡の。名のみとむらん。鏡山の面かげも。今宵は待人あるにぞありける。松風の音羽山とかや。こなたの岡はまそばの花も咲たり。世に逢坂の關はあれど。粟津の原のあはでや歸らん。魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は。人の心あまし。さるは風月の情過たらん。地獄はたゞおろそかに。まして風雅のいとまもなからむ。されば彌陀ほとけのねぶりて。いとたふとげにおはせど。左右の御手の置處なからむに。地藏ほさつは色のみ白うして。梅

の花の寒き所こそおはせね。焔王宮の人ゝも。たゞ世の人の是非のみ見むとすらむ。そも打とけたる心もあるまじ。しかるに杜國嵐蘭がともがら。圖司何がし。岐山の落梧までに。明暮の心隔つまじけれど。十とせあまりの。風雅の變におくれたれば。それも心ゆかぬ所ありて。相手にはいととぼしからむよ。然らばたましゐ誰にかよらむ。歸りて是を見ざらむや。たましゐとく歸りきたれ。むかし俳諧に。詩歌の信ありといはれて。鶯の花に鳴。蛙の水にすめるたぐひ。いづれか信なからんと。俗は是をもて世をいとなみ。僧は是をもて後世をたのまむとせしに。中頃はいかいは信あらずとふみやぶられて。信ある人は。このまとなしと誹り。僞ある人は。このいつはりなしとよろこぶ。そも又炭俵。後猿簑の變なるべし。今や俳諧は。信あらざるにもあらずといはむに。世に指をたふすもの。終にいくばくもあらず。其あらずといふもの。こゝにあらざらんや。此日の魂すみやかに歸り來れ。かへらば吾翁にせむ。魂誠にかへり來れ。魂誠に歸り來れ。

○譜類

百鳥譜

支考

○鶴は仙家のもの也。是がみさほは人にちかゝらず。むかし陶淵明に。達磨の風骨ありといへるものは。鶴に淵明が風流ある事をしらず。されば野草の花の。あきらかにひらきぬる時。柴門の月のあらたにすめる夜ならむ。此ものひとりは見まくおもふ也。しかるを鳶の無能にして。衣裳もおろそかに侍るは。まして風雨にもいとはじとならん。かの莊周が夢に。胡蝶とあそべる。是もむつかしとやはおもふ。

「雉子の啼聲はいとかしこきに。百矢の數をのがれずやあらんといはれて。一朝にたまの命を落しぬるは。是も韓信が葬の。文武をつくさゞるものなるべし。

「蒼鷹の人を見こなして。眼の内に。あらゝかなる才智をそなへたる。いとにくし。されど一藝に名あるものは。世の人それをゆるしもしつべし。

「かの斥鷃が蓬生の宿は。膝をいるゝに過ねば。大鵬の雲の万里をうらやまず。さらばをのれをたのしむのみにして。かならずうらやむ方にもあらず。彼鳳凰といふ鳥は。いかなる鳥にかあらむ。

「稲負鳥呼子鳥とかや。はこ鳥は春に住なるよし。なかぬ物にやしらず。椋と樫との二鳥は。其實をはめる時の名な

るべし。しかるを鶫といふ鳥の。花におきふしたらむ。いと心得ね。木〻の花の咲こほれて。明ほの〻雪にもまがへる時は。駒鳥の聲のみ。ひや〻かにしていとよし。されば此鳥の名は。聲のたぐひをいへるならん。をのれがかたちを。名になせるものは。目白頬白のたぐひなるに。鶫は殊におかし。年〻菊をいたゞきける。自然の理はあやまたねど。ことしは珍しう。梅花をもかざせよかし。

「雲雀は終日に啼暮して。はては雲にもふすにかあらむ。此ものは小春の空をよくおほへて。鳥羽の田づらなどに。ふと啼出たるに。かゐつけて囀る鳥もなければ。あはれさびしきものかなと。おもふ時もある也。

「三光は。啼時に月日星といふなるよし。むつかしとも思はめや。佛法僧と啼鳥ありて。高野の山にのみ住なる。是をも三寶とこそいはめ。しかるに鶯の。法花經と唱ふる。さるは世さらに老めきたるわざ也。提壺の美酒をかひ。布穀の袴をぬけよといふは。皆をのれがゆへならねど。世の人のしからしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼は。きはめて托物の聲ならくのみ。

「秋の鴈の江天におくれ。時鳥の曉の雲にさけぶ。いづれにかさだめ侍らん。鴈はあはれに。ほと〻ぎすは悲し。

「鸚鵡は恩をわすれぬよし。此國にはまれ〻なれば。よくもしらず。むかし蔡君が鸚鵡は。琵琶が身まかりし。跡の名を呼つたへしに。心をいたましむ瘴江のほとり。おなじくあそべどもおなじくかへらずといへる。配所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も。物はえいはゞして。万里の別をしたひ行けるとかや。

蔡(桑十一寅志八三有と伺鳥渡し海ッ蓋三主君一之故事上)

是さへおもひかけぬ事なるべし。

「燕もゆかりはわすれぬ鳥也。終日にひるがへり。終日に囀りて餌にはかならず身をつくさずや。いはゞ江湖の僧の。一夜二夜にちぎり捨て。身を雲水にまかせたるが。年を經て後は。見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の。人にもおくられ。をのれもおくりたらんに。涙のこほる〻はいかなる時にかあらん。かの法師の。宿かし鳥とよみつゞけぬるより。孤村に出て夕陽を啼霜せば。誰が家にか今宵もおくらんと。あぢきなき事もおもはる〻なり。

「鷓鴣とは名のかしこきもの也。青草の暮の雨には。遊子の魂をおどろかし。黄陵の曉の雲には。旅人の涙を催す。すべて夜啼ものはかなしきに。水鷄は隠逸の風情を得たり。

「星月夜のおほつかなき頃は。磯のち

どりのおほくあつまりゐて啼は。心もきゆべくてかなし。たゞ人の別に聖なる所に。水の湛もいと淺くて。常は來馴てあそぶらん。戸などかゐやりたる音に驚て。忽に二三聲のすみ行は。其あとも遙に見送られて。河風寒しと思ひ出たるは。またゐ人もなくて。何にかはせむ。

「鴫はましてたつ時のあはれなるに。馬糞といふ鷹の。風にひるがへりたる。なまうかひにていとにくし。彼澤の夕暮は。江山の風情をそなへたれば。もろこしの雲夢ときこえし澤は。いかなる澤にかあらむ。

「白鷺は人をさけて。をのれ靜なるものなり。しかるを諫鼓鳥の。をのれ啼て。人をさびしがらせむとす。なべて卯の花の臺は。いとねぶゆなるに。夕日の影も木の間にちり殘りて。山にはおもひかけぬ鳩も啼也。啼處のさだかにしれねば。是もいとさびし。此ものはひとへに雨の日をかなしめるとかや。百花の深き所ならば。終日ぬるともいとはざらまし。

「梟の晝出て。まよひありきぬるいとおかし。かならず笑はれじと。はたらきたる顔にもあらず。さるたぐひの老僧にや。むかしも市中にあそびゐける也。

「深草に住なる鶉は。其聲すみやかにして。世をはゞからず。山にもちかく。水にも遠からず。粟の穗の靜なる時は。ここにも出てあそぶなるべし。

「喙木鳥の飢をしのびかねて。木にそひ。梢をたゝきあるきて。終日しづかならぬこそ。はかなきわざなれ。かぎりなき生涯の。いとなみとならば。誰も〳〵あさましき事おほかるべし。されば空山の日影に。雹たばしりて。楢の柏もちり〳〵に吹れ行頃は。此鳥の聲の更に幽にして。いざや。張道士が家を。とぶらふ人にも似たれ。

「木がらしの夜一夜吹あかして。しのゝめには吹すなりぬるを。さし出る朝日の。殊に珍しう。さし籠たる障子のかぎりは。もゆるばかり長閑なるに。物の影のさと過て。またゝきもあへぬは。いかなる鳥にか侍らんと。いつも〳〵おもはるゝ也。蓋蔦などの。ゆるやかに舞ありくも。際を過るほどなれば。あはたゞしきか。

「軒の雀の晴をよろこびて。何やら殊の外に囀る。是は市人にもたとへ侍らん。鶏は碁僧の風情にして。人の際を窺ひありくものなり。家鴨もおなじ家にはありて。をのれが身をおしともおもはずや。たゞに淤泥のけがれをもいとはずして。是を世の外に出て。物にもかゝはらぬとおもふは。さばかり悟たがへたる事は。世の人の上にもあるかし。そなへをきた

る翅も。いつかは青雲の心ざしにあへらむ。誠にあはれむべし。

「世に人を葬る者ありて。常は顔など見合すべきにもあらねど。なすべきわざあれば。呼て酒のませ。價をもやりつ。しかるに鵜といふものは。詮なき鳥なるべし。早川に魚などかづきあげたる。をのれならずとも。網しても得つべし。さるものならば。わきまへぬ事もあるべきに。人の手にかはれて。追はみたる魚をも。白地に吐せて。それをめでたしとささめかし。笹の葉打きせて。おくりもおくられもする人は。鳥よりは一しほもおとり侍らんか。鷹は羽の下に鳥をくみ敷て。譽れを人にも見られむと思ふは。せめて名の爲にもなさばなりぬべし。さらば此ふたつのものを。我友となさば。打をきたる心のいとまもなからん。

「鵜はたちゐにつれなくて、へつらはぬものなり。子など持たらばいかにかあらん。

「鷺の風情はいとなまめかし。何がしの中將が。はつかに人を思ひそめて。雨にもそほち。露にもしほたれて。常の心もさだかならねど。色には出じ。〳〵とこそしのぶなりけれ。されど田面にうかれ出て。田螺ふみまよふ頃は。まさしくさるものゝ。たとへともおほへずなり。

「楚臺の夢は。一夜の枕に驚き。驪山の契は。万里の雲を隔つ。朝の嵐に。錦帳を動せば。李夫人が影も。ふたゝびはかほる事なし。しからば翡翠といふ鳥は。いかなる美人の魂にかあらむ。杜子美が衣裙に啼といへるも。此鳥ならで外はあらじ。名にめでゝ是を我友となさば。はしなき人にやあやしまれむ。名を聞より。其姿のおもはゝ。鴛鴦の中は更也琉璃といふ名は。世の人のきゝをもかざれるかな。

「鶯の聲は。滑にして。殊に住所もいやしからねば。是も美少年のたぐひにはあらめど。風情やゝおだやかならず。まして夜なかぬは。いぎたなしともいへりけり。

「鳶烏の世をさみたる中にも。烏ばかり劣のいやしきものはあらじ。夕べには寐まどひ。朝々にははやく起て。前栽の木の實などにつきては。えおもひ捨ずや。いかなる時にか。息などもつまるやうに啼て。いとゞにくさげには侍るなり。それをも神のつかひのみならば。かゝる事いひもせまじ。

「およそ烏の。劣のたいらぎたるものは。死水のあかを啜り。とがつて長きものは。魚を探り侍る。五穀をはめる烏の。まどかにしてほそやかならぬは。誠に備

たる事なるべし。背のさきのかるまがりたるは。をのれが友をやぶるべきたくみにや。いとおそろし。

「鳥にして鳥の名にあらざるものは。鷓鴣の一名を泥滑〻といひ。倭國にも。行〻子といふ鳥ありて。聲は少にごりたるやうに侍れど。啼時はやゝ涼し。かの明〻といふ鳥は。かしらふたつにてはめるよし。むかへて我友となさば。米櫃の底をやはらはれむかし。

「世を便〻といふ鳥ありて。春秋のさかるをしらず。遊ぶ所又常なし。しかれども。巣つくらふ鳥の。明てはわすれ。暮てはかなしめる類にもあらず。たまゝ啼聲はありながら。公冶長が輩ならねば。しるものなし。一說ニ夜遊テ朝鳴ヲ好ム鳥也。其餌ハ。蕎麥白米ノ類。鱗鎖ハ無ナリ。誠にしるものなからましかば。世にありて是も又詮なし。其形にたぐへたる隆鼻鳥は。常に人の惡をたゞし。愛宕高雄ノ山ニ在テ。杉ノ木ニ厭ル鳥ナリ。迦陵頻は。聲の美におぼれたれば。我はしらず。かの蝙蝠といふものにしたがはむか。

百花ノ譜

許六

○當世の人の花過。古人の質すぎたる。いづれの時か。花質兼備の世あらむ。

「梅の風骨たる事。水陸草木の中に。似たる物はあらじ。十月一陽の氣に。燦〻たる江南の玉妃。まづえめるより。生涯を物ずきにくるしみ。風流のほそみに終る。是を色にたとへていはゞ。吉野高尾などいふべき遊君の。心おとなしく。名を耻。いき過たる心より。桐火の高ぶり。かたち痩ぎすに。涙もろく。きのふの我に飽ける心より。一たび着たる衣類調度など。ふたゝび目にもかけず。人に打くれ。金くれる男なれども。愚癡なるにはすりぬけ。請出さるゝ場所をはづして。はづむだる男の一言に。百年の富貴をかへたり。借錢の利に利をかさね。やう〳〵盛も過たる頃。生前の本望を遂て。幽なる住居に。朝夕の烟をたてゝも。猶物ずき風流の細みに富めり。子さへなくて。夏冬の寐覺もやすし。待事もなくて。世を靜にいとなみ。同穴のかたらひを。なせる人には似たり。

「紅梅といふ花は。一度彼岸參の心を動かし。未開紅の光をはなちぬれども。やがて苦くだけ。花ひらけてより。日〻におとろへ。雨風を帶。夕日にしらけて。つほめる色を失ふ。たとへば三十過たる野郎の。大躍につらなり。心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

「櫻は全盛の傾城なり。天晴當風に打こみたる風俗。行末明日のたくはえ

の。一-黠もなき花なり。

「海棠は。同じく時を得たる野-郎の。大夫と仰がれ。勢ひもさかむに。世ノ中猛-とのゝしれども。質-素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一-色の。欠たる心地こそ本意なけれ。

「梨-花は。本-妻の傍に侍る。妾のごし。よろづ物おもひにうちしづみ。常に人の下にたてるがごし。

「椿は。たゞありの人の。本-妻とむかへたるが。端-手なる風-俗をも似せず。ありがゝりに家を治め。身を脩めるをもとし悖れども。さすが女-色なれば。うす化-粧に紅-粉をたえさぬ。身-持のよき花なり。

「桃は。元-來いやしき木ぶりにて。梅-櫻の物好。風-流なる氣色も見えず。たとへば下-司の子の。俄に化-粧し。一-戚を着-飾て出たるがごし。爛-熳と咲みだれたる中にも。首-筋小-耳のあたりに。產-毛のふかき所ありていやし。

「藤は。執-心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に持けむ。いとおぼつかなし。

「山吹のきよげなる。眉-目容すぐれ。鼻筋おしとをり。襟-廻り奇-麗に生れつきたゞ透-徹なゞといへるばかりにて。さして命をかけてとおもはざるたぐひこそ。女の本-意といふまじけれ。

「長-春。薔薇のたぐひは。紅-白うつくしく。粧ひたるには似たれど。元-來いやしき花の。殊にさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣-嫁といへる辻-君の。日のくるゝを待-兼。世-上に徘-徊し。物ごゝろおぼへてより。其ながれをたてて。五-十にちかき比まで振-袖を着し。始もなく。終もなきこそうるさけれ。

「牡-丹は。寵-愛時を得たる妾の。天-下にはゞかれる。心なけに打ほこり。常は嫉-妬我-執のいかりふかくして。青-天にむかつて。吐-息をつきたる風-情に似たり。

「芍-藥といふ花は。いまだ嫁せざる娘のよはひも二八にあまりたるが。ねよげに見ゆる心地ぞする。

「罌-粟は。眉-目容すぐれ。髪ながく。常は西-施が鏡を愛して。粧-臺に眠り。後-世などの事は。露ばかり心にかけぬ身の。一-念のうらみによりてごそと剃こぼして。尼になりたるこそ。肝つぶるゝわざなれ。

「杜-若は。のぶとき花也。うつくしき女の盗して。耻をしらぬに似たり。

「あやめは。小づくりなる女の。目を病る心地ぞする。

「百合花は數-品おほし。笹ゆり。博多ゆり。鬼百-合。色は異なれども。元-來一-種にして。生-得いやしき花なり。たと

へば輿車にのれる位なければ。かゝえ帶つよくからけあげ。上づりに脛たかく。あゆみ出たる女に似たり。

「姫百合は。十二三ばかりなる娘の。後に帶うつくしく結びたるがごし。

「合歡の花のねぶ氣なるは。深閨の中に縫物をかゝえ。晝眠る女に似たり。過にし夜半の。いかなる事かありて。かくはねぶりけむ。いとおほつかなし。

「其下に晝顏の目を覺したるは。廿にちかき頃まで。男心をしらぬ女の。はじめて宮づかへに出たる頃の。よろづつきなきありさまならんか。

「紫陽花の花は。色白に肥ふとりたるが。ちかくよりてみれば。白病瘡のあとのすき間もなくて。興さめてやみぬ。

「蓮はうつくしき所すくなし。たとへば上手の繪にかける。天人の顏にひとし。どこやら佛めきて。心こそおかるれ。

「卯の花は。第一名目よし。時鳥の來べき頃は。かならず咲とおほえたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は。無下の事なり。卯の花月夜の夕すゞみこ。しろめなる衣裝に。黑き帶仕なしたる女の。ふと打ちたるが。行違ふ程もなく立わかれて。顏のほどもおほつかなく見かへせば。はや尻影ばかりを。見送りたる心地ぞする。何方へかかよふらんといとなつかし。

「朝顏の盛すくなきは。よき女の常は病がちに打なやみ。土用八專のかはるがはる。隙なきに打ふし。一月の日數も。廿日はかしらかけ。引込たるが。たま〳〵空晴きり。朝日さし出たるに。心地よけに打粧ひ。衣裝などあらためて。ほのめき出たるには似たり。

「鷄頭は。和のなき花なり。よからぬ女の。一筋に眞女をたてるがごし。

「らにの花は。蝶の羽に薰物すと。先師の膳より拽出し侍るこそ。其佳人の面影もなつかしければ。これに先をこされて。口を閉ていはず。

「鳳仙花といふ花は。是もけば〳〵しく。紅粉鉄鏊を粧ひ。人の眼を驚かすやうなれども。手に携えて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は。彼出女の李喰口もとには似たり。

「女郎花は。いにしへより女にたとへ。我落にきと。法師の破戒によめるは。女郎の二字になづめるならんか。初秋の風によろめきたてるも。菊にさきをかけられたらむは。手柄やすくなからんと。おもへる物ずきこそやさしけれ。此女郎花といへる物。花にしてはちと請取がたし。たとへば聲のうつくしきを撰みて。小歌を習はせ。髪をおろして是を比丘尼とはいふ也。大卒は女色にし

て。かざりなければ。大象をつなぐべき。執心のきづなもなし。さればとて。男色のかたづまりたる類にもあらで。男女の中にたてる風俗也。此花百花に類する姿なし。古人蒸栗のごとしといへるは。草實のたぐひに比すべきか。莖も花も等しく黄にして下葉すくなによろめきたるは。彼比丘尼のたぐひとや見む。

「桔梗は。其色に目をとられり。野草の中に。おもひかけず咲出たるは。田家の草の戸に。よき娘見たる心地ぞする。

「萩はやさしき花也。さして手にとりて愛すべき姿は。すくなけれど。萩といへる名目にて。人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の。よく歌よむときゝつたへたる。なつかしさには似たり。

「菊の隱逸なるは。和漢ともに名にたちたる花なれば。あらためてはいひがたし。風流物好。目だちたる事を嫌へるは。よき女のおつとなどにおくれて。閑なる片はづれに立しのび。よはひもいまだ三十に。なるやならずの盛なれば。さすがに髪などおろすべくもあらず。たゞ一人あるおさなきものにひかれて。心ならず世中に住侘たるを。はづかしとおもへる人には似たり。

「寒菊の霜をいたゞき。雪をかづける中に。忽然と精骨を蕊したるは。天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果のはてにも。三國。金澤。富山。高岡などいへる所〳〵に。おもひかけず風流のある心地ぞする。

「冬牡丹のしやれ過たる。たとへば大津伏見など。分内狹き所の遊女町。工商の家の軒をならべ。打交りたれば。白地のむすめども。傾國の風俗を見習ひ。養父入。生身玉の里がへりに。しやれを盡し。一向遊女の立振舞に似たれば。兩親いかばかり悲しと制しつらむ。時と所をしらざるは。大きなるいき過ならむ。

「當世の人の花過。古人の實過たる。嗚呼いづれの時か。花實兼備の世あらむ。或問云々。當時人情の花にうつり。鳥に心を驚かしやすきは。ことゞく此文章に盡て。はじめて人の耳目を動し侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は。いかなるをいふにかあらん。おぼつかなし。はやくこれを明し。はいかい大道に悟入させよ。答云々。夫實のかたちをいはむ。荔子の顏のぶつ〳〵としたる。實性の人の髭尤よりくるしく。若暑き題の歌よまむとおもはゞ。はやく此もとに立よるべし。姫瓜の丸顏は。さんちや風の俤あり。瓢の青ざめたる。熟柿のあから顏。下戸上戸はふるくして。今樣は是をとらず。日やけの梨のじや

ぐれたる。座當（頭カ）のあたまこそ。俳諧の實には究り侍る。

山水譜

許六

○凡山水をゑがくに法あり。一丈の山には一尺の樹。一寸の馬には豆ほどの人なるべし。遠人には目鼻を書ず。遠樹には枝なし。遠水波なくして雲とひとしかるべし。岩に三面を見せて。道には二の岐あるべし。すべて畫は遠近を知を第一とす。遠山ちかき山とつらならず。遠水ちかき水とまじはらず。林木遠きものは疎平にして。近きは高密なるべし。葉あるものは枝やはらかに。葉なきものは硬。土に生ずる時はなゝく。石に生ずるものは曲れり。古木は節多して。半は死を書べし。四時の變化を察し、山の淺深をしるべし。山谷樹深き所には。寺觀樓閣の屋ねを重ね。水鄉山店の間には。酒旗の青白を飜すべし。これ王摩詰が。山水の賦の法式なるべし。やまと山水とてかはりあらず。されど城ある所には。天守を聳かし。神社ある地には。鳥居を書べし。山石水木ともにやはらかに。櫻は白妙に。和松は綠にして。これ其和漢各別の沙汰なるべし。富士は下野長く。景大やうに書べし。松嶋はあやしくたえに。景冷じかるべし。象潟は景を殘してあはれに。九世戸は景等一分にして麗しかるべし。須磨明石はあはれにさびしく。吉野龍田は花やかにさびし。住吉は神久て面白く。泊瀨はむかしなつかしかるべし。六玉川。近江八景。風雅の上をもて知べし。唐の僧。和の江湖を見ていへる事あり。これ唐の西湖に十倍せりと。和畫西湖を爲して。帆ある舟をはしらす。唐の西湖は水淺くして。人の溺るゝ湖にあらず。たゞ遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて。切箔惣金をきちらし。丹青鮮かに彩り。黃白細微に文をなす。奴の頬髭に墨を點じ。傾城の唇に丹を含む。これ其遠近をしらざるもの也。假令丹青は塗とも。洛中城外の景色は。まつたく山水の部にして。遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせむものは。先風雅をしるべし。古人畫中ノ詩。詩中の畫といふは。此所なるをや。世に料理する者。魚鳥を切事を知て。喰事をしらず。畫工はゑがく事を知て。面白事をしらず。されば面白事しらずして。面白事を書ざるは。何のおもしろき事あらんや。

風俗文選 三

蠶虫說　青堂　紫賣說　九拍
閉關說　芭蕉　師說　許六
名阿段說　許六　出女說　木導
雜說　不知作者　愛猫說　百子
門字藥說　朱廷　草苅說　露川
山羊說　晋仲　朝霄感說　屯龍

風俗文選卷之四　五老井　許六選

○説類

蓑虫説　素堂

○みのむし〳〵。聲のおほつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵となくは。孝に專なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも。聲と臭を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。

「みの虫〳〵。聲のおほつかなくて。かつ無能なるをあはれぶ。松虫は聲の美なるが爲に。籠中に花野をなき。桑子は絲を吐により。からうじて賤の手に死す。

「みのむし〳〵。無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく。蜂は蜜をいとなむにより。往來おだやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。

「みのむし〳〵。かたちの少なるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば。其身をうるほし。一葉を得れば。これがすみかとなれり。龍蛇のいきほひあるも。おほくは人の爲に身をそこなふ。しかじ汝がすこしきなるには。

「蓑虫〳〵。漁父が一糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず。風波にたへず。幾度かこれをときて。酒にあてむとする。太公すら文王を釣の謗あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたけらる。

「みのむし〳〵。王虫ゆへに袖ぬらしけむ。田蓑の嶋の名にかくれずや。いけるもの誰か此まどひなからん。鳥は見て高くあがり。魚は見て深く入。遍照が蓑をしぼりしも。ふるつまを猶わすれざる也。

「蓑虫〳〵。春は柳につきそめしより。櫻が塵にすがりて。定家の心を起し。秋は狹ふく風に音をそへて。寂蓮に感をすすむ。木がらしの後は。空蟬に身をならふや。骸も躬も共にすつるや。

又以男文字述古風

蓑虫〳〵
一絲欲絶
似寄居狀
白露甘口
從容侵雨
栖鴉莫啄
天許作隱
脫蓑衣去
落入腦中
寸心共空
無蜘蛛工
青苔粧躬
飄然乘風
家童禁叢
我憐稱翁
誰識其終

凡兆

柴賣説

○柴賣の柴うる事。小野。細河。く

らま。高雄もあれ。矢背。小原は。花園梅が畑よりは先おかし。深山柴をのが窟に折くべてといへるは。すめるあたりの氣色ならん。かの秦の毛女が賢にも似ず。河陽の焦子が仁にもあらず。唯世渡りのよすがにして。女は都に出てこれを賞。夫は山に入てこれを樵る。頭は日に晒せども黒く。足は泥に染れども白し。さすがに建禮門院の女房。阿波の典侍の局などいふ人の名殘あるにや。あをきひとへは。色香の爲に衿をつくろひ。結して二布をあらはし。白き手おほひ。しろきはゞき。白き帶はうすくたゝむでうしろにむすびさけ。幾男の心をかゝ動す。春は躑躅山藤を戴き。茅花虎杖をたばね。行さきゞ〳〵の山づとゝなしぬ。道のほど一里二里。とをくは三里にあまりて。肩かゆる業もなく。花の陰には睡をもかけず。漸く京の町にちかづきては。歸の事どもちぎりて。大路小路にわかる。或はおろして門をはき。あるひは出口の市に米をしろがへて。小袋の首をくゝる。月の夕はつれにおくれて。紅葉の雨を分行こそ。いつかは我屋にいたらめと。見るをだに物うきに。東の翁の笑ひて曰々。身のいやしきを思へば。官女もかたらひがたし。心の鈍を思へば。傾城もなをまじはりがたし。若妹背をなさむに。此をなごをなむといたはり給へり。左禮言ながら殊勝にぞ侍る。

閉關說

芭蕉翁

○色は君子のにくむ所にして。佛も五戒のはじめにをくといへども。さすがに捨がたき情のあやにくに。あはれなるかたゞくもおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに。おもひの外の匂ひにしみて。忍ぶの岡の人めの關も。もる人なくばいかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の波の枕に袖しほれて。家をうり身をうしなふためしもおほかれど。老の身の行末をむさぶり。米錢の中に魂をくるしめて。物の情をわきまへざるには。遙にまして罪ゆるしぬべく。人生七十を稀なりとして。身の盛なる事はわづかに二十余年也。はじめの老の來れる事。一夜の夢のごし。五十年六十年のよはひかたぶくより。あさましうくづをれて。宵寐がちに朝起したる。ね覺の分別なに事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱增長して。一藝すぐるゝものは。是非の勝るもの也。是をもて世のいとなみにあてゝ。貪欲の魔界に心を怒し。溝血におほれて。生かす事あたはずと。南華老仙の唯利害を破却し。老者をわすれて。閑にならむこそ。老の樂とはいふべけれ。人來

れば無用の辯あり。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊(孫)敬が戸を閉て。杜五郎が門を鎖さむには。友なきを友とし。貧を富りとして。五十年の頑夫。自書。みづから禁戒となす。

〈朝がほや晝は鎖おろす門の垣

師ノ說

許六

○いにしへ學ぶものは必師あり。師は道をつたへ。業を受。惑を解ものなりと。されどもろこしにも。此事久しくたえてつたはらず。まして吾朝には。むかしよりさる事をきかず。往昔神道のさかむなりし時は。唯一の師ありて道を教る事。退之がいひにかはらず。然るをいつの頃よりか。兩部といふ事はじまり。神道は日〻にをとろへ。佛法は月〻にさかむにして。和國の風俗はたえ果。やう〳〵家〳〵に大黒どのをあがめ。初春をむかへては。え方棚にしめ引まはしたるこそ。はつかに和國の道の殘りたるしるしならめ。當世佛道の師たる人を見るに。大路に門をし披き。鐘鼓を打て貴賤をあつめ。利益を說て寶を時かす。其弟子となる者を見るに。孤になりて家業にたよりなき人。あるは飛鳥川の淵瀨にかはりて。家を黃田をうり果ては。行所なき人。又はあほうの子共。片輪者の行末。父母の產つけたる黑髮。露ばかりもをしまず剃落し。素性法師がつぶりを撫ては。たらちめはかゝる涼しき事は。よもしらじなど輕みに落し。何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど。世を渡る口すぎなれば。巫醫樂師。百工の師を求むるにかはらず。又は弓馬兵法の道。諸禮。躾方。讀書。有職の師たる人の。油斷せぬ顏つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ。其弟子を强力と名付。比丘尼の師たるものを。お寮といひて。其弟子を米かみとはいふなり。伊勢冨士の神職の人を。御師といふはいかなるゆへかしらず。其道其業を敎へて。仁にちかしとはいへど。年の暮のあはれを感じては。二朱雲歩の使を待かね。無盡の企。表がへの割付もうるさく。朝夕の摺鉢時を考へ。夜食の遲きなら茶を侘たり。さらは世の風俗にして。敎ゆる人もぬからず。まして習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに俳諧の師たる事。貞德老人よりおこりて。貞室は弟子となり。花の本をうけ繼。これを天下の宗匠とはいふならし。それより扇子小路に。點者の看板をかけて。あたらしき道を說て。宗匠めくものは。一座一興の宗匠にして。眞の花のもとゝはいはず。先師芭蕉翁。ひとり天下

に甲たり。世擧て道を受。まどひを解。これを天下の宗匠とはいふなり。今のはいかい人を見るに。一生師と賴む人も見えず。見取聞どりの人眞似に。朝夕をあやまり。まどひより惑ひに分入事をしらず。人生れながらしるものなし。師にしたがひて惑を解。師說にうとき人は。自己の善惡を究る事をしらず。先師身まかりて。十とせ餘。二とせの春秋をへぬれど。師の餘光いまだ國中をかゞやかせり。其道を繼十哲の門人。口をならべて。我こそ血脉道統なれと。手ほめの宗匠にかどはされ。眞の道統ある事をしらず。其人の俳諧をしらんとおもはば。先其所のはいかいを見るべし。眞の俳諧一人あれば。一鄕すべて道に迷はず。これ言下に惑を解て。あらぬくまぐまをたどらぬ故なり。玆に弟子孟遠。余にしたがひて道を聞事久し。我官椅縣命につながれ。沈痾老衰の床になやみて。たすけとなる事稀也。今かれが爲に師說作つて送る。かならず余が俳諧のたとき事を知て。余がはいかいのたふとき事に迷ふ事なかれ。若明眼有德の師あらば。すみやかに乘かへて。行たき方へ行べし。

名ニ阿段說

許六

○左右の下に物をつけて。文字の埒を明したるを社。李斯が手柄とはいふなれど。通字ありて己の己ともよむまじければ。なくても事は欠まじくや。名目のなき世ならば。一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もせず。尿桶に飯をもらぬためしは。ありがたき名目にあらずや。さるを今の人。名は天地以前より。つけ置たるとおもへる。いとはかなし。けふ名をあらため。明日はや目のさけやう。鼻のかゝり。さも呼べき人とは見する。敎識とは顯密の名。鐵巖とつめてはぬれば。禪師の號。大むね一派一流の名目あり。もろこしの人の名つく事。深き心なし。敵を殺して我子の名とし。白魚を得て其名を定む。わづか一兩字の間に。ふかき心をふくめ。夕可木端の類も。漸きゝあき。一笑志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が渴をとゞむ事。杜子が獠奴に等しければ。名づくる說つくつて。かれにとらする事かくのごし。

出女說

木導

○傾城傾國は。唐人のつけたる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた。かぞふにいとまなからん。國〳〵の名目。當世の洒落。柄扨。干瓢。白人。巾

着のたぐひ。大むね一種より出て。位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆへにや。少子細過て。おほくはふるみに落たり。爰に道一人が〻りの遊君ありて。終に人の魂をとらかす意氣張も見えず。まして歌よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ。酒のみ。言語進退のやすき事は。かりに和光同塵の姿をあらはし。慈悲第一の出女とはいふなりけり。倩生涯のありさまを見るに。地をはしる旅客の勞をなぐさめ。女郎花のたぐひにもあらで。江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立の旅人を送り。打着姿をぬぎ捨ては。箒を飛し。蔀やり戸おしひらきてより。やがて衣引かづき。再寐の夢のさめ時は。腹の減期を相圖とおもへり。高足打の塗膳にすはりながら。通りの馬士に言葉をかはす。やう〳〵奮の日ざしはれやかにかゞやく頃。見世の正面に座をしめ。泊り作らんとて兩肌ぬぎの大げはひ。首筋のあたりより。燕の舞ありく景氣こそ。目さむる心地はせらるれ。關札の泊りをうけては。あたらしき竪縞に。京染の帶むすびさゆて。鬢の雫のまだ露ながら。門の柱にうち添たるは。かれが一世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかばかりの仕合すらんもしらずと。賴母しく見やられ侍る。あるはすさまじき髭やつこになぶられ。弓同心の灸のふたづけかへ。座敷の手拍子に輕忽の聲を上て。返事をこたへ。油火かきたてる指は。をのがつぶりにぬぐふなるべし。青天に塗木履を引づり。急用には赤脚で飛。御油。岡崎の全盛もむかしになり果。斑女照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて。月落烏啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に。宿かさぬ君もなくなりて。今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて。大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる頃は。いつとなくよはり果て。鼻の下の煤氣も寒く。木綿所の小車の音も。さびしく暮て。水風呂の火影に足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく。表向は勤もせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ。夜更亭主しづまり。ぬけ道よりしのびやかに。書院床の小障子あけて。神の瑞籬もはゞかりなくて大股に打こへ。終に一夜の枕をならぶ。出替は年の暮を定め。給分の加增は赤前垂をこざる。物皆終りあれば。古蓮も蔦にはなりけり。此ものゝ行衛何にかならん。昔は普賢ほさつにもなりける先例もあれど。今

はすこしの違ひありて。果は駕籠昇の妻にこもり。痩子あまた産捨。間鍋の間に餓て。生涯を終る。未來とても覺束なし。紺屋の地獄まではあれど。出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八万地獄の門〳〵にたゝむも。又あはれなるべし。

雜ノ說

不知作者

○人物禽獸は。其人物禽獸の粉骨なる所に倒れ。山川草木は。其山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆をのがたのしみの纔なる所に。たふれ果るも哀なる事なるべし。翟臺は無爲に倒れ。仲尼は仁義にたふる。莊老は寓言にたふれ。神仙は靈異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ。楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ。水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ。野老はにがきにたふる。長はながきにたふれ。短はみぢかきに倒る。されば瘡を愁ふる人は。痒をかく所にたのしみ。貧をくるしむものは。盜賊の難なき事をたのしぶ。是皆和漢人情の趣く事は。さらく〳〵かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に。西行は歌に倒れ。宗祇は連歌にたふる。先師はせを翁は。はいかいにたふれて。生涯を終る。其門葉あまたの中に。たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとをきにたふれて。微細の論をきかざれば。一十余年半は流行し。半は流行せず。洛の去來は。風雅の正直にたふれて。春風桃李花の開くる日をしらず。其角は作にたふれ。支考は理にたふる。凉莵はふるみのしたるきに倒れ。露川は誹諧の數にたふる。史邦木導は風雅のつよみに倒れ。千那李由は。風月の情の過たるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ。丈艸は松本の閉關にたふる。杜國は横にたふれ。惟然は高みにたふる。尚白は忘梅の趣向に倒れ。許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば。はせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ。櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝもあれば。我は我に倒るるものなり。（本書の初版本と推定せらるゝ「本朝文選」には杜國以下を「諷竹は大坂に倒れ、尚白は大津にたふさる。桃隣は松本の追善に倒れ、酒落は難波の病床にたふる。風雪は妻にたふれ、如行は友にたふる。正秀は金山に倒れ、乙州は兜にたふる。舍羅は道樂にたふれ、惟然は高みに倒る。我は口にたふるゝものなり」とす。）

愛梅說

万子

全篇散ノ梅而無二梅字一。終句以二一梅字一結之

○屈原楚辭にわすれ。菅家宰府に招く。西の對のおぼろ夜に。我身ひとつをかこち。孤山のたそがれに。疎影横斜をうつす。山路の朝日のどやかにさし出たる。折かけ垣の匂ひ殊に春めき。谷の扉うらゝかに打霞み。竹の嵐枯葉がちなるに。初音ほころび。十月江南の天氣。醉客馬にねて。酒家の村を出。師走の冬籠たる。越路の雪の中に。朝數寄の袂に匂ひをとゞむ。遍照が折箸。皇居の額。數珠。十露盤の粒。者木。染屋の汁。これ皆かれが。風姿風情のわづかの端なるべし。彼說にいへるは。牡丹は花の冨貴なる物なり。菊は花の隱逸なる物なりと。是そのかたちによる。其愛する人によれり。蓮は花の君子なる物なりと。是は其理屈によれり。我は其理屈をとらず。梅は花の風雅を好むもの也。我は其風雅を好むものを愛する物なり。

艸字藤說

程巳

五老井四絶之一也

○草臥て宿かる藤は大和路や。實となつては。詩讃のかたちにあらはれ。手折て蓋笠にかざゝば。大津繪の風流なるべし。高松に倚托して。俟者のためしにひかれ。梅の傍に來れば。怒て斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山主常に餅をたしむに何の興ありて。かゝる袋ゝとは長き事ぞ。我おもふ。草字藤は。藤の中の下戸なるべし。情中にあれば色に出ず。これ其餅のかたちをあらはし。三尺さがりを咲けるよと。賓主とり廻してぞうらやまれける。

〽打鎹に蛸のかざしや藤の花

草刈說

露川

○松の葉かきは雪間のけしきありながら。その親のまづしきより。其子はつゞれ着ておかしからず。馬糞かく子のいかなれば。親もなく。兄弟もなく。いづこより出て。いづこには歸るらん。さゞ波や。粟津の松の木の間かけて。馬の鈴音に風情は得たれど。蛇のいふかるなき名なるべし。此草刈は。笛の名人。さてこそ牛にも乘せておきたれ。夏は朝かけの。見てもいと涼しく。百合風車刈入て。絡緯のゐて鳴日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず。道かきいそぎ。荷ひつれたるに。空また晴て又おかし。鈴鹿はかゝるけしきありて。坂は日のてる所なるべし。

〽草刈の道〳〵こぼす野菊哉

山ノ芋ノ說

吾仲

○芋に數種あり。山中に生ずるを山芋と號し。自然生と稱して山藥に用ゆ。畑に植てまろがせとなるを。つくねと呼んで。其功もすくなく。其味も次也。秦楚には玉延といひ。鄭越には土諸と號す。杜詩囊中の法をこゝろみず。陳簡齋は玉延の賦作る。鍾山の薯蕷は。三日炊るれど色を變ぜず。我國みちのくの芋は。糸を引事糊のごし。四月に葉を生じ。初秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて座禪豆に入られ。いもが子はは ふ程とよみて。叡聞に預る。寒夜の寐酒には。峨肩山の芋をすり込。卯月の麥飯には。まり子の宿のとろゝをうらやむ。世に腎藥ともてはやされど。貧僧の爲には少よろしからず。人參よく人を活し。よく人を殺す類なればとて。櫻椢ばせをを植まぜて。其勢ひをもどされけるこそおかしけれ。

嘲ニ宵惑ニ說

毛紈

○秋の暮のあはれをしらぬ人は。入夢をこのみ。長雪院(隱)をする人は。唐樣の書をすく。風雅のうつる。うつらざるの蓮ひなり。かの人生得灯を見ず。眠室にかきこもり。寐る事を樂の最上とする。寐酒さめ。夢盡て。ひたものねがへれども。夜の明るけしきもなく。屋普請の胸算用も仕あき。大國を領じ。治めむとおもへば。言下に治り。又は金持の浪人となりては。嵯峨の奥に引こみ。斗藪頭陀に心を變じては。松嶋象潟に身をよす。されど繪に書る色に心を動かし。獻立紙にすはりたる心地せられて。やがて興盡ぬ。たま〳〵庚申の夜ありて。宵寐せぬ物とおどされ。大欠に懸金をはづし。田樂の燒るを待かね。病人の夜伽にあたつては。藥風爐に顧を焦す。かゝる人たのしぶといふ事をしらず。琴碁書畫は屏風の摸樣とおほへ。花鳥風月は手本に書とばかりしる。昔宰予が晝寐も。夜ふかすあてにねつらんかし。古人の燭をとるといへる。誠にゆへあり。人生七十今時はいきず。たとひ五十で死たりとも。百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴻は。鷹につかまるれど。夜出る惰鳥は。網にかゝりても。やがていなさるゝを。たふとしとおほえたり。

獲麟解解　許六
改竹　長雪隱解　許六
數聲者解

○解類

獲麟ノ解ノ解

許六

○魯の哀公十四年。西の狩に麟を得たり。孔子大きになけき給ひて。春秋をとどむ。夫麟はいづれの時出て。孔子は見覺え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命をたもつ。麟は四靈の隨一にして。狩ある事をしらず。うろたへ出たるも又いぶかし。孔子みづから聖に高ぶり。もしや牛馬の生れそこなへるにてやありけむ。これも又いぶかし。麟うせ。道おこなはれざる物ならば。道は麟にのみありて。聖人の上にはなき事にや。猶又いぶかし。麟ほろぶれば。聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも。道はまさしく存せり。是とてもなゆくにたらず。

五老井

許六選

儒道たふとしとおもふものは。麒麟を第一にたふとび。次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離れ。櫛の齒欠れば子に別るゝ占とて。童蒙のものはふかく悲しめり。箸おるゝ毎に親にもはなれず。櫛木履欠るたびに。子を失ふにてもなし。されば仁義の占もあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや。又聖人を好ぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以來。孔子の外出たる聖なし。和國も神代より打つゞき。當時百年枝をならさぬ聖朝なるに。麟鳳出たる取沙汰もなし。犬は戸口を守り。鷄は時を報ず。麟出て人もおどさず。鳳啼て旅客の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人。いよ〳〵目出たかりぬべし。見ぬ唐土の鳥もねじと。徹書記があやまりた

るは。もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして。麟鳳にのみ目をつけて。末の凡夫の不目利は。かの一言のあやまりにて。聖人なしとおもふなるべし。今此麟を解して見るに。とまり兼たる春秋の。よき場所に出合せ。擧句の趣向と見こなしたらば。何の麒麟に理屈のあらむや。

長雪隱の解

許六

○一藝の達人は。鄉童に上座を許され。名字持たる人と。座席の爭ひをする。早喰。早糞は。男子の一藝とは稱じ侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも。一藝一德ありて。万德一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め。山といふ隱語を殘し。森蘭丸が。きざみ鞘かぞへたるは。信長公も藝者と見えたり。詩歌連俳の名句も。此所より產出し。大悟十八度も。此室に入て工夫を極めり。つくづくと一とせのあはれを盡して。鳴や霜夜の蛩。蔦の紅葉目をもる月夜まで。人に心はつゝめり。いにしへより朝市に隱家ありといへるは。慥に此所の事なり。世務所用のいとまなき身も。しばらく閉關する時は。印纓を解て。公役を許す。いそぎ閑居に入て。跡を遠ざけ。半日の寂莫を樂まむと。尻をかゝげて走る。

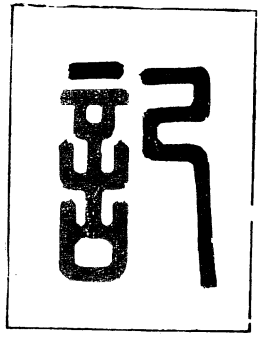
へ何おもふ長雪隱のしぶ團

藪醫者の解

汶村

○世に藪醫者と號するは。本名醫の稱にして。今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時にか。何がしの良醫。但州養父といふ所に隱れて。治療をほどこし。死を起し。生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ。其業を習ふ輩。津〳〵浦〳〵にはびこり。やぶとだにいへば。病家も信をまし。藥力も飛がごし。それより物換星移つて。今は長助も長庵となり。勘大夫は勘益となる。當時の藪連を見るに。先門口に底拔の駕乘物をつるし。竹格子に賣藥の看板をかけて。文字の紺青も。半は兀たり。たまさかの藥取を賴みて。藥店にはしらせ。物申は暖簾の內に答へて。女房の顏をつゝむ。町役には窄舍を療じ。藥代にめでゝは。河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね。鶴虱は鶴のしらみをさがす。藥のみも次第にかれて。胃の氣よはり。元氣衰へて。果は何がし村の道場の明をまつ。我俳諧の道をもてこれを押ば。師說もいまだとをからざるに。其手筋を失ひながら。宗匠めくをみるに。今はやらるゝ紗綾ちりめんの。

乘物の中もおほつかなく。緋衣木蘭色の さとりの拂子も。心許なけれど。佛一法には藥一毒の氣一遣なければ。其分なるべし。たゞ藪醫一者のやぶはらに。又出る竹の子も。藪とならむこそうるさけれ。



落柿舍記　去來
幻住菴記　芭蕉
丁八樓記　丘老井記　許六
九華亭記　汶村　堯琴亭記　許六
風臺水臺記　許六
附紀行
紀鳴紀行　芭蕉　雨竹紀　寺島　許六

風俗文選卷之五　五老井　許六選

○記類

落柿舍記　去來

○嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど。このみも持一來らず。代がゆるわざもきかねば。もし雨一風に落されなば。王一祥が志にもはぢよ。若鳶一烏にとられなば。天の帝のめぐみにもれなむと。屋敷もる人を。常はいどみのゝしりけり。とし八月の末。かしこにいたりぬ。折ふしみやこより商一人の來り。立一木にかい求めむと。一一貫一文さし出し悅びかへりぬ。予は猶そこにとゞまりけるに。ころ〳〵と屋根はしる音。ひし〳〵と庭につぶるゝ聲。よすがら落もやまず。明れば商一人の見舞來たり。梢つく〴〵と打一詠

め。我むかふ髪の頃より。白髪生るまで。此事を業とし侍れど。かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價へしくれたびてむやと侘。いと便なければ。ゆるしやりぬ。此者のかへりに。友どちの許へ消息送るとて。みづから落柿舎の去來と書はじめけり。

ヘ柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住菴ノ記

芭蕉翁

○石山の奥。岩間のうしろに山あり。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。蔓に細き流を渡りて。翠微に登る事。三曲二百歩にして。八幡宮たゝせ給ふ。神体は彌陀の尊像とかや。唯一の家には。甚忌なる事を。兩部光をやはらけ。利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日頃は人の詣ざりければ。いとゞ神さび。物しづかなる傍に。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもり壁落て。狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは。勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを。今は八年ばかり。むかしになりて。正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年ばかりにして。五十年やゝちかき身は。養虫のみのを失ひ。蝸牛の家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこがし。高すなごあゆみくるしき。北海の荒磯にきびすを破りて。今歳淵水の波にたゞよひ。鴉の浮巣のながれとゞまるべき。芦の一本の陰たのもしく。軒端茨あらため。垣ね結そへなどして。卯月のはじめ。いとかり初に入し山の。やがて出じとさへおもひそみぬ。さすが春の名殘も遽からず。つゝじ咲殘り。山藤松にかゝつて。時鳥しば〳〵過るほど。宿かし鳥の便さへあるを。木つきのつゝくともいとはじなど。そゞろに興じて。魂呉楚東南にはしり。身は瀟湘洞庭に立。山は未申にそばだち。人家よきほどに隔り。南薫峯よりおろし。北風海を浸して凉し。日枝の山。比良の高根より。辛崎の松は霞こめて。城あり。橋あり。釣たる舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲。籠の小田に早苗とる歌。螢飛かふ夕闇の空に。水鶏のたゝく音。美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は。士峯の俤にかよひて。武蔵野へふるきすみかもおもひいでられ。田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて。網代守にぞとよみけむ。萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯に遣のぼり。松の棚つくり。蕨の圓座を敷て。猿の腰掛と名づけ(くカ)。彼海棠に巣

をいとなび。主-薄-峯に菴を結べる。王-翁徐-侄が徒にはあらず。唯睡-辟山-民となりて。孱-顏に足をなげ出し。空-山に虱を捫-座す。たま〳〵心まめなる時は。谷の清-水を汲て自炊ぐ。とく〳〵の雫を侘て。一-爐の備いとかろし。はたむかし住けむ人の。殊に心高く住なし侍りて。たくみおける物ずきもなし。持-佛一-間を隔て。夜の物おさむべき處など。いささかしつらへり。さるを筑紫高-良-山の僧正ば。加茂の甲-斐何がしが嚴-子にて。此たび洛にのぼりいまぞかりけるを。ある人をして額を乞。いとやすゝと筆ゐ染て。幻住菴の三-字を送らる。頓て草-菴の記-念となしぬ。すべて山-居といひ。旅-寐といひ。さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠。越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。晝はまれ〳〵とぶらふ人ゝに心を動し。あるは宮-守の翁。里のおのこ共入來りて。ゐのしゝの稲くひあらし。兎の豆-畑にかよふなど。我聞しらぬ農-談。日-既に山の端にかゝれば。夜-座靜に。月を待ては影を伴ひ。燈を取ては罔-兩に是-非をこらす。かくいへばとて。ひたぶるに閑-寂を好み。山-野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病-身人に倦で。世をいとひし人に似たり。つら〳〵年-月の移こし。拙き身の科をおもふに。ある時は仕官懸-命の地をうらやみ。一たびは佛-籬祖-室の扉に入らむとせしも。たよりなき風-雲に身をせめ。花-鳥に情を勞じて。しばらく生-涯の計とさへなれば。終に無-能無-才にして。此一-筋につながる。樂-天は五-臟の神をやぶり。老-杜は瘦たり。賢-愚文-質のひとしからざるも。いづれか幻の栖ならずやと。おもひ捨てふしぬ。

〽先たのむ椎の木もあり夏木立

十八樓記

芭蕉翁

○みのゝ國。ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀鳩氏といふ。稻-葉-山後に高く。氣-山左-右にかさなりて。ちかゝらず遠からず。田-中の寺は。杉の一むらにかくれて。岸にそふ民-家は。竹のかこみのみどりも深し。曝布所〳〵に引はえて。右に渡し船浮ぶ。里-人行かひしゆく。漁-村軒をならべて。網をひき。釣をたるゝ。をのがさま〴〵も。たゞ此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るばかり。入-日の影も月にかはりて。波にむすほるゝかゞり火の影もやゝちかく。高-欄のもとに鵜-飼するなど。誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟-湘の八のながめ。兩-湖の十の境も。涼-風一-味のうちにおもひためたり。もし此樓に名をいはむとならば。十-八-樓

ともいはまほしきなり。

〻此あたり目に見ゆるもの皆涼し

五老井ノ記

許　六

○靈泉あり。水のたゝゆる事。纔に尺あまりにして。三尺の盆池よりながれ出る事。潺〻滔〻たり。五老井と名づく。別墅をひらきて。五老庵を結ぶ。主人姓は森。名は許六。みづから五老井ノ先生と僭す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川ながれて。鳥籠の山南に近し。十旬の休暇をうかゞひ。半日の閑を窃ずる所なり。遙に聞。東江はせをの翁。錫を坂西に赴しめ給へるの折ふし。靈泉を共に汲で。風騒の句ひを。草の中にとゞめむとならし。其水の清き事は。惠山の泉脉を通じ。甘き事は肅州の金泉にひとし。立かへる春の朝。白散の藥をさけてより以後。四時の牛涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に。わきて泉を翫ぶ事は。夏を主とす。霍山唱が井盤の納涼。西上人の柳の陰も。今此水に俤そひぬ。其德其要廣大にして。神佛のたふときをすゞしめ。且堯の井を掘。禹の水土をたいらけてより。四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゝ栗の岡といふ。晴にのぞみ。雪に對して。眺望きはまりなし。湖水の嶋〻。江南江北の山のたゝずまる。日枝伊吹の嵩。比良三上の高根に。眸をさく。西南の間に千鳥が岡あり。聖德太子の御歌より。犬上の名どころとなりぬ。杖を曳ては籬を廻り岡に登る。蕨は齋をたすけ。栗は茗粥を炊ぐ。抑庵は。纔に莚三枚をまうけて膝を窄め。賓主六人一座に全からず。茶碗五。枕五。筆墨の外に物なし。月に杜鵑をそへ。驛路の鈴に。里の砧を合せて。秋をかなしむ。庭に箒をあてず。樹に木鉾を入ず。窓前の草をのづからなり。たま〳〵畑を穿ては。狛の瓜種を求め。五色の茄子を植るといへども。山蟻の爲にせゝり落さる。吁僭居士。文藝に僻する事二十余年。子瞻芝瑞を師とし。楊子。梅道人が骨髓を伺て。雪裡のばせを。炎天の梅。自然に一味の風雅を兼むとす。世上予が筆痕を樂て。予が心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあらそひ。畫圖は鄕童の前のたはぶれとなる。いまだ風雅の爲に。文藝をたのしぶといふものを聞ず。予と共に志を同じうして。はやく吾をたすけよや。〳〵。終日樹下に徘徊すれども。更に答ふるものなし。四隣の鳥聲。花間の蜂蝶のみ。笑て靑天に腹皷を皷し。五老の流レに脚を洗て歸る。于時元禄五年壬申ノ春。二月。於三婆樂樹林下一濯レ塵。

〻水筋をたづねて見れば柳かな

九花亭記

汶村

○亭あり。九花と名づく。九華は何ぞや。抑九花安妃は。神仙の名にして。山に九花あり。丹に九花あり。衾に名あるは王侯の用る處。魏の武帝は臺に名づけ。唐の伊氏は室に名づく。觀あり。殿あり。帳あり。扇あり。菊に九花の名ありて。茶にも又此美稱あり。上清眞人は。日月を呼んで大寶九華とし。李正臣は。壺中の九花をたくはふ。建勳は九花先生と號し。荀鶴は九花山人と稱す。我四柱の亭。九は陽の極數といふ。理屈にもわたらず。華は壯麗のひくみにもあらず。たゞ方寸をやしなふの天地にして。春は曙。千里鶯啼て。梅かうばしき朧月に囀き。青楓風すゞしく。ほとゝぎすあやめにかほり。水鶏若竹に敲く。萩女郎花露細うして。菊は黄に。柞さびしけなり。比良伊吹遠くそびへ。金龜金花ちかく峙てり。亭外の風物すくなからず。亭中の物數。又いくばくぞや。屏風傘珠嚊疊。馬一疋。鶏一羽。亭あり。其主人は誰ぞ。近陽城下。松氏汶村みづから記すといふ。

琵琶亭記

許六

○むかし嘉祥の頃。貞敏といふ人。三面の琵琶を唐土より傳り。猶代〻に作りおかれたる。樂器おほしといへども。あるは火の爲にやかれ。又は田舍の士に落て。口おしき事のみおほし。こゝに名物一面ありて。終にもてあそぶ人なし。嶋の經政も。撥短うしてとゞきがたく。闘の蟬丸も。膝せまければすみ所なし。柱には四の嶋〻をたてゝ。落べきわづらひもなく。何某が袂のそくいゐもいたづらなるべし。撥面にはから崎の松をゑがき。覆手には。勢田の長橋を横たへたり。二の月は。出しほ入方のながめを添。四時の細きいと筋を。絃手にねぢあけ。花さそふ山風に。春のわかれをおしみ。鶏鳴濱の夕ぐれには。秋のあはれをかなしむ。あけては彈じ。暮てはおさむ。倦時は比良横川に足を打かけ。眠る時は三上伊吹に枕を高うす。此亭のあるじは誰そ。杉原氏みづから高ぶり。これを琵琶亭と名づく。むかし伯牙がしらべも。鍾子期が耳なくては益なし。これをきく人は誰そ。五老井の許子六。力を合せ口にまかせて記す。同じ穴の狐の寄合。犬の嗅つけぬ間を。重寶と見るべし。

風臺水臺ノ記

許六

○四―梅―廬の南北に。風―臺水―臺を築く。風は涼をとり。水は月を弄するの心なるべし。春の風あたゝかに吹ば。水香しうして。梅の影を浸し。秋の嵐雲に晋―信ては。池あれて荷―葉おろそかなり。主―人律―師。風に乘じて遊び。醉客李氏酌で月をとる。兼て榮―耀をこのまざれば。まして名―利の煩しきもなし。常に風―狂の遊―士。此臺にのぼつて。風―水の二を評ふ。其爭ふ處は。たゞ餅酒にあり。上―戸―方は。風―臺にふかれて水をうらやみ。下―戸等は。水―臺に腹をふくらかして風を望む。其いどみを見るに。蝸―牛双―角の評に等しく。源―平水―陸の戰に似たり。されど酒のみは。舌もぢれ。足よろめきて。下る事得難く。餅―好は。胸こがれ。喰おもりして。更に動に懶し。終に相―引に引―退き。上―戸は。桓―公の蚊となつて禮を忘れ。下―戸は。蝦蟆と化して。腹を撫て樂しむのみ。

許六選

○紀行類

五老井

鹿―島―紀―行

芭蕉

○洛の貞―室。須磨の浦の月―見に行て。へ松かけや。月は三五夜中―納―言といひけむ。狂―夫のむかしもなつかしきまゝに。此―秋鹿―嶋―山の月見むと。おもひ立事あり。伴なふ人ふたり。ひとりは浪―客の士。ひとりは水―雲の僧。僧はからすのどくなる墨の衣に。三―衣の袋をえりに打かけ。出―山の尊―像を。厨―子にあがめ入て。背―中にせをふ。柱―杖曳ならして。無―門の關もさはるものなく。あめつちに獨―歩して出ぬ。今ひとりは。僧にもあらず。俗にもあらず。鳥―鼠の間に。名をかうふりの。鳥なき嶋にも渡りぬべくて。門より船に乘て。行―德といふ所にいたる。船をあがれば。馬にものらず。細―脛のちからためさむと。歩―行よりぞ行。甲斐―國より。ある人の得させたる。檜―木もてつくれる笠を。をの〳〵いたゞきよそひて。やはたといふ里をすぐれば。かまかいの原といふ。ひろき野あり。秦―甸の一―千―里とかや。目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く。二―峰ならびたてり。かの唐―土の双―劍の峯ありと聞へしは。廬―山の一―隅なり。雪は申さず。先むらさきのつくばかなとは。我門―人嵐―雪が句なり。すべて此山は。日―本武―尊の冒葉をつたへて。連―歌する人のあるべからず。句なくは過べからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて。爲―仲が長―櫃に

折入て。都の土産に持せたるも。風流にくからず。きちかう。をみなへし。かるかや。尾花みだれ合て。小男鹿のつま戀ふ聲。いとあはれなり。野の駒。所得がほにむれありく。又あはれ也。日すでに暮かゝる程に。利根川のほとり。ふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて。武江の市にひさぐ者あり。宵のほど。その漁家に入てやすらふ。夜の宿聖し。月くまなく晴けるまに。夜船さしくだして。鹿嶋にいたる。晝より雨しきりに降て。見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚。いまは世をのがれて。此所におはしけるといふを聞て。尋ね入てふしぬ。すこぶる人をして。深省を發せしむと吟じけむ。しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴ぬるを。和尚おどろかし給ふれば。人ゝおどろき出ぬ。月の光。雨の音。たゞあはれなるけしきのみ。むねにみちて。いふべき言の葉もなし。はる〳〵と月見に來たる。かゐなきこそほゐなきわざなれど。かの何がしの女すら。時鳥の歌。えよまでかへりわづらひしも。我ためにはよき荷擔の人ならむかし。

〇月はやし梢は雨を持ながら　翁

〇雨に寐て竹おきかへる月見哉　曾良

南行紀

李由　許六

〇烏は黑く生れながら。鷺の白からん願ひもなし。笠はあるにまかせ。雨をしのぐ物に。蓑は蓑はあれど。今樣は合羽で仕廻ふ。錢を入たるは。草鞋一足にて。天晴旅人の出立は出來たり。二月晦日といふ日に。蝸牛の家を離れ。名吉の國廻りにうかれ出て。田づらの柳。木瓜すみれ。遠音の雉子のうす曇。旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと。杖の頭をからめかし。首にかけたる頭陀袋。身は雲水の果しなき。布引山の山中に。道づれせばやと見れば。見しれる聖なりけり。男是より。角文字やいせの野飼の。跡や先やと打つれ。やがて土山の泊につく。手ぶるき水風呂の時宜に時をうつし。聖長袖の役に。其夜はあら湯を請取。明日よりは湯番の前後を定め。猶日〳〵の事を筆に記さむ。これも湯番につけて廻すべしとて。書記も湯番も男に渡しぬ。

明れば彌生朔日。湯番の男ぬからじと起て。行べき所へはしる。例の一藝長ゝと勤ければ。聖もゝ尻にて待兼たり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり。並木の木陰まだほのくらく。遠近人の笠の内。そろ〳〵見えたり。鈴鹿山越むとて。聖駕籠。男馬。

〇天井に首はつかへて山ざくら　聖

〜伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇　男

「下り坂。山あひくらく。朝霞の中に。坂泊の咄も程なくちかよりたり。

〜鶯も竹屋どまりや朝あらし　聖

「晝氣色は。關の地藏にて見るなり。茶店をすこし打たゝきて。しばらく腰をかけたり。

〜田樂やあふのく口になく雲雀　男

たそがれ過る頃。雲津に着ば。宿の案内もおぼつかなし。

「二日。聖夜ぶかく起て。非番の男を起す。煤氣たる行燈の影に。會津瓮の打ひらめたるに。日野椀の壺皿。いとさびしけにつきすへたり。見る目いぶせく胸ふさがり。やがてもかゝらず。杉箸しらけ直し。腹のけしきつれなければ其日の役をはらふ。はき物は寐所よりしめつけ。笠は上壇より着ながら。此宿を出たり。前後の家並はしづまりかへり。左右の鷄の聲。みだれたる中を出ぬけて。火縄の火影ちら〳〵と見えがくれなり。紀行毎に。溫庭均(筠)が早行も聞あきぬれば。此度は法度にして。雲津川の假橋を渡る。かくはいへど景氣胸の内にうかめたり。松坂の矢川といふは。人の面白がる所なり。其所さき肩にとへば。今は絶てたゞの所になりたりといふ。筑摩。朝妻。江口。神崎は。むかし語りともおぼえぬるに。きのふの淵は。けふの矢河となりて。人かはり。家かはりぬれば。搗米の船には。むなしく蠅のむらがり。草履草鞋の鎹は。徒に風に動く。今は其土に色香もなし。

〜松坂や越後屋とへば江戸　男

ざくら

〜出女の雪むら消て明野哉　聖

宮川の渡りを越て。代垢離の子共は。蛙のごく。一錢剃の鍬は。蟹に似たり。

〜髪結の腰にしだるゝ柳かな　聖

山田に入て。何がし大夫のもとにつく。日高ければ。參宮の支度して出たり。抑神前に詣でぬれば。よろづの事は忽ちまち。わすれて。かたじけなさの一すじに。涙はおとし侍りぬ。

奉納二句

〜青海苔も和光の塵のひとつ哉　男

〜松櫻川を隔てゝ墨の袖　聖

天の岩戸に入れば。灯明かゞやかし。常闇のむかし思ひ出られ。有難き事かぎりなし。

〜穴藏と見ればおそろし雉の聲　男

内宮に詣でゝ。御社ちかき杉のむら立に。御裳濯川はきよくながれ。御寶前はしん〳〵としてくり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまとはありて又上もなき嶺の松風身にしみわたり。小袖の膚にさはりぬるも。いま〳〵しき心地

せられ。あまりに忝きと思ふおりは。さむきものなり。又奉納。

〻百八のなみだのかゝる巌かな　聖

〻今ぞしる月日の花も梅さくら　男

つきせぬ御名殘も暮に及べば。すでに御暇申て出たり。二見の方もゆかしけれど。行さきいそがしければ。おもひとゞまりて。例の大夫の許に歸りて臥ぬ。

野集序　芭蕉　猿蓑序　其角

新後園序　支考　近江八景序　千圃

四紀文章序　春曲　要文集序　許六

亜相積合序　許六　赤生後序　許六

銀河序　芭蕉　春御序　竹枕

○序類

曠野集序

芭蕉

○尾陽蓬左。檜木堂主人荷兮子。集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此

五老井

許六選

名ある事をしらず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此郷に旅寐せし。おり〳〵の書捨をあつめて。冬の日といふ。其日かけ相つゞきて。春の日また世にかがやかす。けにや衣更着彌生の空のけしき柳櫻の錦をあらそひ。蝶鳥の。おのがさま〴〵なる風情につきて。聊質をそこなふものもあればにや。糸遊のいとかすかなる。心のはしのあるかなきかにたどりて。姫ゆりのなにゝもつかず。雲雀のおほ空にはなれて。無景のきはまりなき。道芝のみちしるべせむと。此野の原の野守とぞなれるべらし。

元禄二年彌生書

猿蓑序

其角

○はいかいの集つくる事。古今にわたりて。此道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として。其句に魂の入ざれば。夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとどまり。ながく人にうつりて。不變の變をしらしむ。五德はいふに及ばず。心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人

の。骨にて人を作りたてゝ。聲はわれたる笛を。吹やうになむ侍ると申されける。人には成て侍れども。五の聲のわかれざるは。反魂の法のおろそかに侍るにや。されば玉しゐの入たらば。アイウエヲよくひゞきて。いかならん吟聲も出ぬべし。たゞ俳諧に魂の入たらんにこそとて。我翁行脚のころ。伊賀越しける山中にて。猿に小簑をきせて。はいかいの神を入たまひければ。たちまち斷腸のおもひを叫びむ。あだに懼るべき幻術なり。これをもとゝして。此集を作りたて。猿みのとは名づけ申されける。これが序も。其心をとりて。魂を合せて。去來凡兆のほしけなるにまかせて序す。

宴柳後園序

支考

○世にあそぶ人ありて。綾羅錦繡にたのしぶ時は。樂つきて後たのしむものなし。山林樹下にあそぶものは。心にみたざれば。世にうらやむかたも出きぬべし。此ふたつのさかひに居らざるものを。心に天遊ありとぞ。むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし。三四の友達ありて。あそぶ事日あらず。額には閑の一字を題して。しづかならぬ時は横になし。やかましき時はさかさまに置て。その時の心に隨ひ行は。大小の額見る心にや侍りけむ。此日東花坊も。此中にあそびて。人〻酒のまむと催したるに。心に物をとめ。口に余情をいふ人ならば。罰は金谷の酒もおしからむ。俳諧に案じ入たる時は。こよりといふものして。くさめさせむとぞたはぶれける。

近江八景序

千那

○近江八景は。湖水の絶景をあつむ。比良堅田より。三井石山につらなり。粟津辛崎を見渡し。勢田矢橋を合せ。瀟湘の八景になずらへ。八の所を定む。そのかみ永祿第五。仲秋の月に乘じて。近衛の政家公。石山寺にあそべる時。はじめて此景を詠ず。すべて我朝國〻の八景。諸寺諸山の十境。題せずといふ事なし。されど此湖上の八に。いまだ並ぶものを見ず。いにしへより。八の詩歌はあまたあれど。俳諧の八景ある事を聞ず。されば況江八景はあふみ人がよしとて。繪は五老子が筆をかり。題はわが里。堅田の病鴈の夜寒をはじめ。自他遠境の作を集て。すでに近江八景の一軸となす。これをあつめ。是に自序するものは江州の産。浦萄坊の主人。僧千那。筆を本願寺の東軒にとる。

四絶文章序

李由

○許氏が五老井に四絶あり。絶は絶勝の義なるべし。ひとつには艸字藤。二には揚揮豆。三には雲花園。四には紫芝岡なるべし。我問事あり。四は須彌の四州によるや。曰く。不レ然。四海四方の四にあらずば。四時四月の四ならずや。曰。不レ然。四恩四教の四にたよらずば。四民四姓の四の數によるや。曰。不レ然。四天四睡の四をねがはずば。四王四皓の四をうらやむか。曰。不レ然。我惘然として問をやめたり。許子が曰。分別理屈は我有にあらず。若三絶五絶の增減あらば。吾子が算用はたち所に相違すべし。たゞ一二三四の第四番にあたれば。四絶とはいふ也。むかし愚なる法師あり。無才にして法名の文字にくるしめり。ある人をしへて云。まづ法の一字をかしらにかうぶらしめて。下はいろはを以てつぐべしと。法師おほきにちからを得て。やがて法以法呂と。段〻に名づけて。すでに一二の篇にいたり。第六の番にあたれり。時にかはらけ賣身まかりて。法名たべといへば。法六と改名して。やがてとらせぬ。妻子ふかくかなしび。たとひ此世の業は是非なし。せめて來世に生るゝ時。此苦患をたすけたべといへど。法師かしらをふりて。我法名は土のたぐひにはあらず。今六の當番なれば。是非なしとて。終に法六になして贈りぬ。今予が四絶もかくのごとし。おの〳〵これを感じて。說。賦。銘。贊の四文を書して。終に五老志にとゞむ。某李由これに一章をくはへば。おそらくは五絶とならん事を知て。やがて四文章の始に序して。此心をのべて。此罪をのがるゝのみ。

要文集序

許六

○相坂山の杉に雪はふれども。法花經〳〵と囀出し。淀のわたりの夜ぶかきに。本尊かけた〳〵とぞ鳴ける。百千のとり〻〳〵に。おのが一聲の外に。かはりたる音聲もきかず。烏のかあ〳〵と鳴暮し雀のちい〳〵と同じ事囀るに。飽ずやありけむ。本尊をかけ。法花經よむ烏は。かあ〳〵。ちい〳〵よりは。少物しりたる顏つきこそおかしけれ。其顏つきにても。同じ事ばかり囀るに。イヤ。チウ。にくし。可愛しのかはりめやありけむかし。よくぞ聞わけける。もろこしの鸚鵡といふ鳥は。人のいふ事をよく眞似ける。此國に渡りても。和語を聞しり。父母。翁。口鼻をよくぞまねける。此鳥此國になければ。はじめ終り慥ならず。かれもこれも。もどかし鳥といふは。父母の產つけたる囀りもなくて。明幕諸鳥の眞似を所作とし。一生甜袋にたくはへた

る囀りもなし。たゞさら〳〵。さら〳〵と袴ふりける柞原に。ある事ない事虚言八一百。これを樂の最上とおほえて。筆にまかせ書付たるを。要一文一集とぞ申侍りける。

【畫一樓繪一合ノ序】

許　六

○和一朝のいにしへ。繪かく人の中に。火一難に家を燒て。不一動一尊の妙一筆をふるひ。あるは他の國に趣き。漢一王の夢に入て。雪ふねの名を殘す人もありけり。當一世の風一情はあはれすくなし。布一袋。福一祿一壽の二一筆をおほえて。あつばれ畫一師の一一列に入。弟子となり。師と頼む時。第一一番に人一前をおしへ。次に筆一法をしめす。唐一土のゑかく人は。樓を造りて人を禁ず。起てゑがき。寐てゑがき。おのが精一神を盡す。猫をゑがきて鼠を絶すも。むべなるかな。われ畫一樓を造らむ事。望久し。されど沈一痾老一病につかれて。筆をとる日稀一也。一とせの中。夏一暑の六一七一月は。墨爛れ。膠とらけて。ゑがく日なし。冬一寒の三一月は。水一凍。筆かじけてゑがく日なし。是を一とせ五ケ月の禁一筆とさだむ。猶雷一雨風一霜は。一一日の禁一筆。又公一私のいとまをぬすみ。花に座し。水に戯れ。月に嘯き。雪に吟じて。又ゑがく日すくなし。たま〳〵清一朗の日あつて。ゑがゝむと席をうつし。水を汲一時。例の雜一客入みだれ。あるは物一喰。酒飲。炭火にからをはたき。果は莊一蝶が生一寫しにあき果て。今一年の春。頻に畫一樓を造る。おほきさ方一丈餘。東一西の銘は。薄一暮雲一露のくらきを扶て。北に書一齋あり。半一日は樓にのぼり。半一日は齋にこもる。人一來て繪を好む時。きはめていふ詞あり。遲き事は。三一會の曉を期すと約して歸る。次の日來て。はや遲一遲の罪を責む。予が隣一家にすむ人。一一生ゑがく事をしらず。一一生遲一ゝの罪をうけず。我たま〳〵繪なつて求に應ず。遲しといへども隣一人にははやし。三一年過る日は五年め也。五年終る時は。七年の月一日也。これ成一就の時一節としるべし。樓一成て門一弟一子六一人。題を探て。人一物山一水花禽をうつす。各一軸を懐にして左一右に列なり。すでに勝一負を爭ふ。此撰にもるゝ門一人すくなからず。これを畫一樓の繪一合といふ。樓一主五一老一井。許子六。自序作つてふける。鄭一公が樗一散にして。老一畫一師と稱ずるのみ。于レ時元一祿壬一午ノ冬。十一月日書レ之。

【麻一生一後一序】

許　六

○麻一生の名を。烏帽子折ともいふは。好に赤烏帽子と。同じゑほしの釋なるべし。すべて世は好嫌ひの二一より流れ出て。天一

地黑白のたがひともなるなるべし。妹といふは人丸の好。西行はなりけりより事起りて。後京極殿は。雪の明ほのやうを好給ふ。俊成卿の鶉に。寂蓮法師の槇の夕暮は。たま〳〵なるべし。桃といへば、桃隣にきはまり。翁は菖蒲をすかれたり。是は精進物の沙汰に及べし。晋子が傾城に。阿山人が出女は。朝夕にして。名護屋の柿の。かの字のひゞきは。末摘花のから衣と。同じ五音のカキクケコなるべし。鳥落人が。赤いは〳〵の赤きは。好に赤烏帽子の。あかい所を發明したり。さればば。撰者の范学も。柳後園の一人なれば。柳の青き所をも。此集に述らるべしと。俳諧大居士跡す。

銀河序

芭蕉

○北陸道に行脚して。越後國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこおりふしたり。みねの嶮難谷の隅〳〵まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見わたさる。むべ此嶋は。こがねおほく出て。あまねく世の寶となれば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞えあるも。本意なき事におもひて。窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら〳〵と冴たるに。沖のかたより。波の音しば〳〵はこびて。たましゐけづるがごく。腸ちぎれて。そゞろにかなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なにゆへとはなくて。しほるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒序

野坡

○とうがらしの名を。南蠻がらしといへるは。かれが治世。南蠻にて久しかりしゆへにや。（末詳）酸醤子。天覗き。空見。八なりなどいへるは。おのがかたちを好める人〳〵の。称びて付たるなるべし。皆やさしからぬ名目は。汝が生得のふつつかなれば。天資自然の理。さら〳〵うらむべからず。かれが愛をうくるや。石臺にのせられて。竹緣の端のかたにあるは。上ゝの仕合なり。ともすれば雷鉢のわれ。底ぬけ釣瓶に培れて。やねのはづれ。二階のつま。物ほしの日陰をたのめるなど。あやうく見え侍るを。朝貞のはかなきたぐひには。誰も〳〵おもはず。大かたはかづら髭つり髭の盆雄にかしづかれて。貧乏樽の口をうつすみさかなとなり。不食無菜の時。ふ圖取

出され。おほくは奴僕豆腐の頃。紅葉の色を見するを。菜花の最上とせり。かくはいへど。ある人北野詣の歸るさに。道の邊の小童に。こがね一兩くれて。汝が青ゝとひとつみのりしを。所望せし事ありといへば。いやしめらるべきにもあらず。しかじ。今は其人ゝも此世をさりつれば。いよ〳〵愛をも賴むべからず。からき目も見すべからずと。小序をしかいふ。

石臺を終に根こぎや番椒

飲食龜鑑 壽六

醫藏 壽六